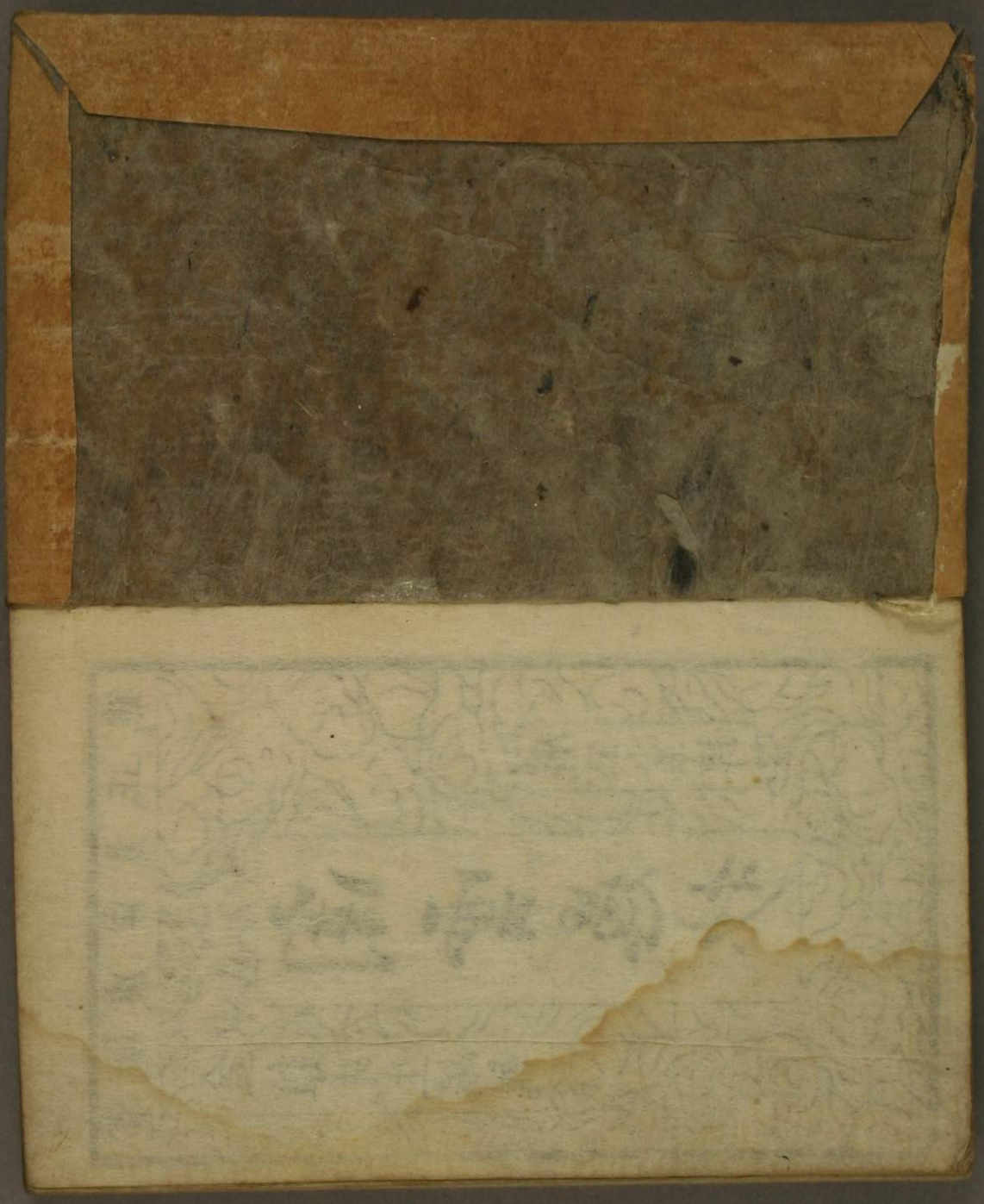
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

0 1 2 1m 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 JAPAN



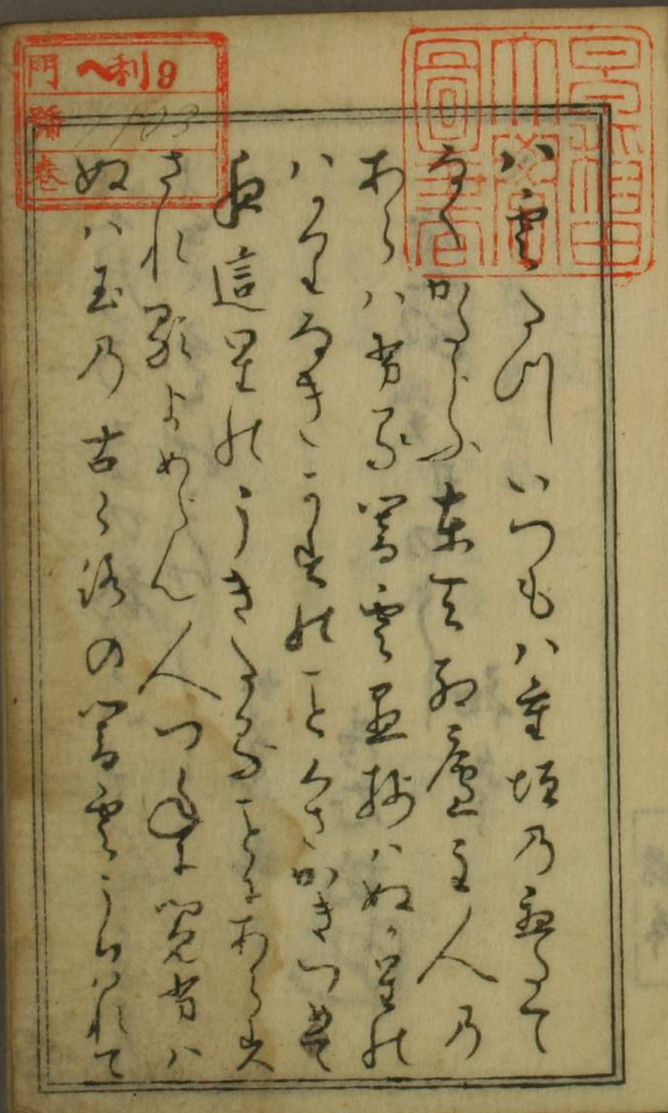
寛政庚申月正鐫

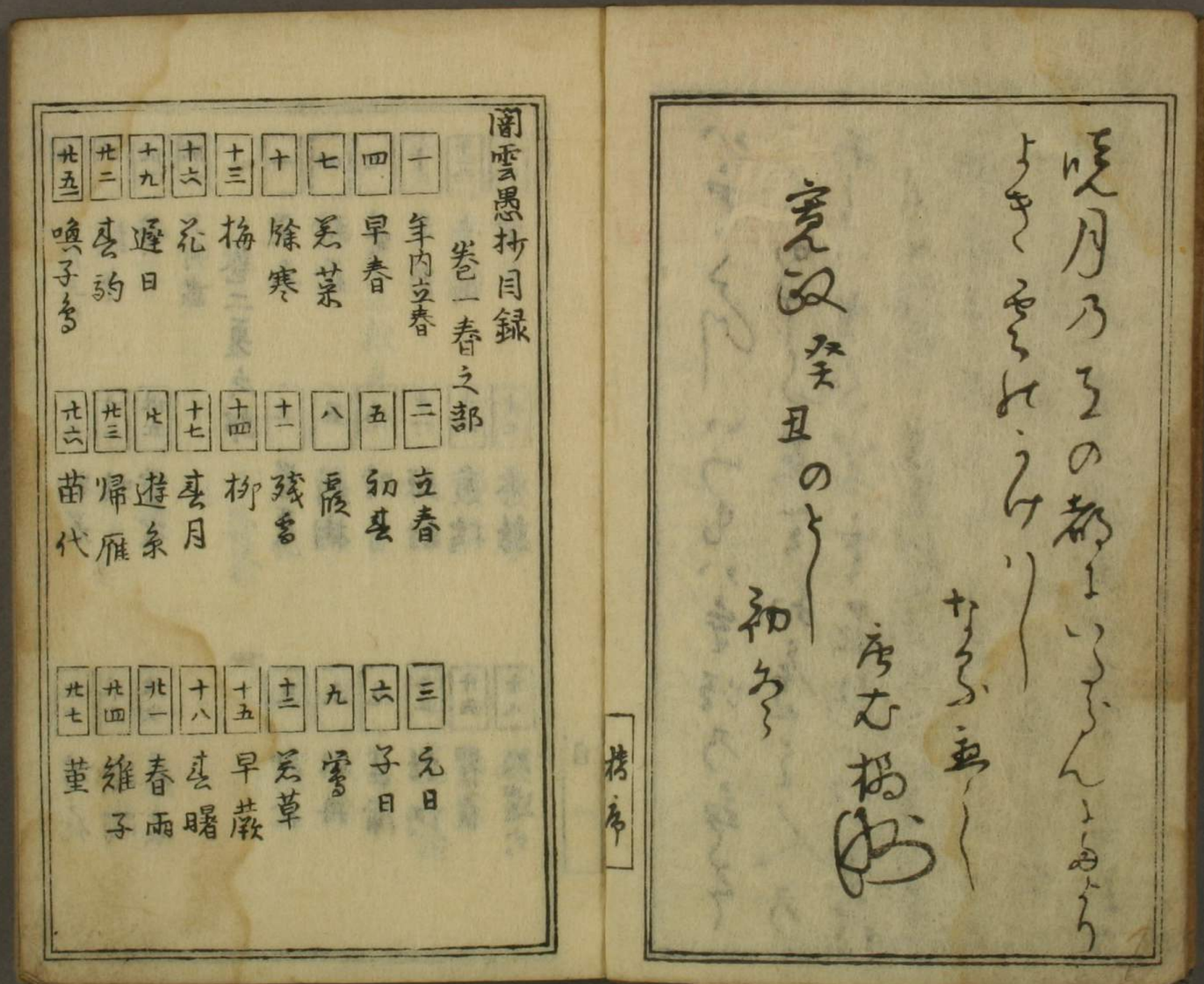
金雞先生編輯

# 閑雲愚抄

瑞玉堂梓

利9門
藩
巻







寛政癸丑のとし　初冬

庵主　梅

園雲愚抄目録

巻一春之部


一　年内立春
二　立春
三　元日
四　早春
五　初春
六　子日
七　若菜
八　霞
九　鶯
十　除寒
十一　残雪
十二　若草
十三　梅
十四　柳
十五　早蕨
十六　花
十七　春月
十八　曙
十九　遅日
廿　遊糸
廿一　春雨
廿二　春駒
廿三　帰雁
廿四　雉子
廿五　喚子鳥
廿六　苗代
廿七　菫

九八 三月三日
九九 牡若
九一 鶯
九二 蛙
九四 蕨
九五 雲雀
九七 三月盡
三十 苑花
三一 躑躅
三三 蟇
三六 暮春

卷二夏之部

一 更衣
二 首夏
三 卯花
四 殘花
五 新樹
六 牡丹
七 葵
八 時鳥
九 菖蒲
十 早苗
十一 照射
十二 躑躅
十三 五月雨
十四 魚樹
十五 蜀
十六 螢
十七 水鶏
十八 蚊遣火





十九 夏月
十一 夏草
十二 夕顔
十三 蟬
十四 蓮
十五 夕立
十六 納涼
十七 荒和筋

卷三秋之部

一 立秋
二 早秋
三 殘暑
四 七夕
五 草花
六 萩
七 萩
八 女郎花
九 藤
十 蘭
十一 雁
十二 鹿
十三 野分
十四 雲
十五 霧
十六 槿
十七 秋夕
十八 釣
十九 月
十一 鶉
十一 鶉

九二 秋田
九五 菊
九八 紅葉

卷四冬之部

一 初冬
四 時雨
七 雪
十 子雪
十三 細代
十六 雪狩
十九 埋火

九三 擣衣
九六 九月九日
九九 暮秋

二 落葉
五 霜
八 寒芦
十一 氷
十四 神樂
十七 炭竈
二十 歳暮

九四 虫
九七 葛
三十 九月尽

三 殘雪
六 霰
九 冬月
十二 氷雪
十五 佛名
十八 衾
九一 除夜

卷五恋之部

一 恋
四 不逢恋
七 初逢恋
十 旅恋
十三 恨
十六 弱恋
十九 名立恋
十二 変恋
十五 隔恋
十八 老恋

二 初恋
五 待恋
八 後朝恋
十一 思
十四 関恋
十七 新恋
九 別恋
十二 久恋
十六 忘恋
十九 幼恋

三 思恋
六 変恋
九 逢不逢恋
十二 片思
十五 凡恋
十八 別恋
九一 場恋
九四 近恋
九七 終恋
三十 等思女人恋

八一 思三人意
八四 寄月意
八七 寄山意
四十 寄水意
八三 寄香意
八六 寄玉意
八九 寄紅意

一 曉
四 海
七 雪

卷六雜之部

二 松
五 山
八 秤

八二 寄天意
八五 寄雲意
八八 寄閑意
八一 寄水意
八四 寄獸意
八七 寄糸意
五十 寄弓意

三 竹
六 苔
九 澤

八三 寄地意
八六 寄風意
八九 寄火意
八二 寄竹意
八五 寄魚意
八八 寄硯意

十 猫
十三 老人
十六 楊貴妃
十九 寺
九二 述懷
九五 附録

十一 閔
十四 田家
十七 拾女
九 羞
九三 神祇
九六 祝

十二 別
十五 山家
十八 王昭君
九一 奇常
九四 懐舊

一 狂哥事由
四 片頭
七 子示を案
十 六義

二 狂の一字
五 倩頭
八 三粹
十一 寸粹

三 頭取淡方
六 落歌
九 皮肉骨
十二 躰用對

十三 禁忌
十六 承香殿四傑
十九 五婦人
九二 六国史
九五 古狂哥書
九八 五味五影
九一 重陽九首
四四 十三夜十三題
四七 堀川次郎百首

十四 七種菜
十七 新六哥仙
九 三條三世
九三 二十一代和哥集
九六 今狂哥書
九九 六根六首
九二 十界十影
四五 十五夜十五影

十五 鞠場四本
十八 利休壺五人
九一 三部書
九四 萬葉假名
九七 五行五頭
三十 七夕七首頭
四三 十如是十頭
四六 堀川太帝百頭

同録畢



## 閻雲抄をちうさをふ引

去六金雞大人北社盟より問うふ寝語所美憐ぬしのうはし
をけるを。悦秘ある紙。たのれ請求く。初めき向ふるを岩清水。
はるかもあるを。をふ。をまをれさをを。をを。伊豫の湯をを。
をふも。をを。をふ。をむ。をは。ゆふまをの。をく乃詞をを。
加へをふ。をを。をを。うれ戸。をを。の。をれ。をを。をを。
はを。をを。をを。をを。をを。をを。をを。をを。をを。
の。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。
を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。
一附が身の遊戯。を。を。を。を。を。を。を。を。を。
を。の。高。調。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。

[illegible]

瑞玉堂主人[illegible]



# 園雲愚抄卷一春之部

## 一　年内立春

年の内に春きたる　一とせに二たび春たつ　[illegible]

[illegible]

## 二　立春

[illegible]

伊勢暦にこの内に梅の花おれば春きたる　真影

春たつ　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

千代のさんにー　ーとらくハ　ーすれや　花のー　ーれすあるる原
霞をもる　天の戸れ光　佐保姫の五彩の衣　雪れもれて
ちる新はるもの矢れもふれて玉　宝ゆり玉かすみうる紅　定九
良科程おうらうるはるなさ玉のうるゆう新ちうもんろう　光

三　元日

掛元をうんたゆ玉つ矢れ帝も今新ちあるふ元　日　軽人

四　早春

巣のよるふ玉ふ浅めるるいくるとつるるハ新るるを山も寒ふう　仮寝

五　初春

うるれあきまるやこうみの大拉宝鶴の徒ゆ叫ろくるくろう　金鈴

六　子日

春日の日　ーの友　ひめ小松　ちつねの松　ちるるめにひく　野へのふ松
子代のちー矢　松の子年　玉の島とわ　光ねの松　ひくまの野へ
春日野　千代の古原　亀の尾山　ちるる山
清泉寺ある山ぬ子日れ姫小松　新れ玉経の玉ゆ新るるく　仲住
安衛ちとんやとるめん大玉まれ新ちるくき松を引くく玉ぬ玉ハ　遊人

七　若菜

玉ゆ新ちるふ　ーつむ　野玉のー　ちるるめきう　雪原れー　ゆけのー
浜のー　陸れー　ほるるー　ほるるふー　のゆちー　新の野ちる
大ちゆ人　野ちる　ちるれる原　古野　玉野　花尖野
春日野のー花大れ　ちるれる原　玉野　玉ゆ　赤良
つるるゆれるれふ新ちれ日　柏子原ゆよふるる面のせん玉れの　楊洲

八　霰

[illegible]　八重[illegible]　初[illegible]　新[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
初霰　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

九　雪

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

雪の[illegible]へ行よ生れ[illegible]ゆ[illegible]ん色のひ[illegible]れ[illegible]の[illegible]ものとまさ　橘洲

十　除寒

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

十一　殘雪

あい雪　雪のむらきえ　[illegible]　[illegible]の雪間　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

十二　差帥

[illegible]の[illegible]　[illegible]の[illegible]　[illegible]

一系のちつろ　うらつろ　あさうとう　雪れてかめえ
生碎ハ孫よけよるもつろ　ろまに差を結久ことそれりふ　梅例

十三　梅

むめ　の花ハけー　者のー　垣ねのー　ーうえ　冬木のー　老木の
ーのかすえ　袖のーぐく　風のーう高　かされー　匂ふあうう　私のー
匂ふ花　那波　小野　宮漆　くうふ心　梅沙
那波沙を　ふくまそめを　かるも雨の匂ひ　ちくの梅　金陽
ちまてそつくうれうー　袖左　あちうちう　死野路の梅　生新

十四　柳

やなぎ　ーけ糸　青ー　岸のー　左のくけー　門のー　丈なのー
ーうふふ　ーの髪　風にうう　そめそみうう　ふひく

みとうのすも　かさと　うくうふ　猿沢の池　うむろけきー
糸砧ハ似ふふ柳をうけー　梅くう浮世のちうをちう花出え　金鶏
出風ふうきつうれて青柳のめけ出ふほとけちう花そする　伊勢

十五　早蕨

さつひ　ー出ふ　松のイつひ　其のー　若のー　ま折ー
むうちイ　山つと　孫人をく　ちうにあるぬ　其日江　袖ふる山
佐保姫の涉ハ山け脊をうけく　ぞとん巴ハ出ちさつひ　金鶏
めえ出ちみとうこのけれ　おけくやあうはてく　其のさつひ　ちう尾

十六　花

ーのたと　ー漆衣　かうれー　れてひも　ーの枝折　ー乃雲
ーのかうみ　ーけ居　やうれぬー　ーさうう　樣ちて　花のちう雲

[illegible]　初秋　をつ不山　あつ〻山　吉羽山　大ひえ　清秀
大井川　高山と山　かつらき山　をむろ山　ちゝ川の岸
より陣山去年の枝折を見遠へくうつたく花の花盛ふ　定丸
見る一家風をふ川はさらゝ花ふ庭の雪ふ絲はしゝ雲　橋湖
弁当の仮もむすへよ樣ゝとちしこみゝてい亀はさゝ　あひ　光
一日をもあくのこゝ移りゝ久へて見る恋い浮世の動実乃か　生彩
入くの多ませまて今〻きい月代ゝ花恋ゝ　喪成
ますとにふゝい春の〻ふ附樣や花は王と見ゆゝん　桂人
入相の待ゝちけいゝてゝ風いゝ不ゝ花はゝんへき　金埒
三度ふ加ゝ見あゝにあゝむれい命いゝふは下にゝあれ　躯積
切基をひきれゝゝ雰囲ゝ見せゝふ清ゝは　東作

十七　春月
花不ゝ歩　春むゝ歩の月　光ゝもゝすむ　春むゝはは　さゝゝにゝふく
むつゝの月　きちゝ紀の月　ゝすみゝちゝむ
ゝゝふゝゝゝゝゝゝ一向ゝ氣象はゝゝ雲の春先月　金鶏

十八　春曙
多むあけかの　花の撲雲　山のゝゝすむ　山ゝゝ　去のゝ先
花ゝ明　愛きむふ　春ゝゝ　ゝゝむ　ゝゝのゝ
耶郷の松とあちゝゝちゝ風ゝさゝゝて業花の雲乃明不の　光

十九　遅日
れゝゝ紀　いゝ陽ある日　ゝれゝく日　樣にゝゝ　ひふ孫
のゝゝある風はゝをゝくゝ陽ゝれは雲の日待はのひゝとつ　白壁

二十 遊糸

あそふいと そむかいとゆふ 風に乃出ハ 霞のひまにあそふ
其の日ハ次戸も 明石そみるきうら 一めんに捉ふ糸ゆふ 仲塗

二十一 春雨

木のやちるさわ こゑもちるさわ 秋まのし 千程のし 草木もめくむ
新のいと糸 折の玉糸 花の東 はくくと きしつるかれ
ぬるともゆかん 霞に紫く
千金のつ花れらいちと見ゆるかふ小極とおりて ふ止る其さわ 万象

二十二 春駒

野への其的 いさむしいちふ ふとろち あそく こうしまに あさかの沼
伯楽か矢をすえてや 放ちえん其の野個の的いちふ 夕かり 三陀

二十三 帰雁

かりかね 帰るし との一つう かすみにきゆる かえるふ雲井
店の玉つさ 花を見すてて 越路すかつる 由良の戸 次戸
おゝし
数々事て 鳴る残花みして 採も見ほよいそく一ノ金 雨什

二十四 雛子

きても恋く もそ野のし つまごひ ふろこゑ 子をたのふ
ありかしらぬ やけ野れきては 焼原野 春日野
親さまらにきては なんをなんとして 巣れ立もかくよとや鳴 美憐

二十五 喚子鳥

友よふことり 人し 心細くも こゑまれおく 山ひこ 人まれ山

むらしらを猿まねしてなくほとゝぎす　金時

二十六　苗代

あらしろも、小田のあらしろ　綾うゝ　まさすゑ　うゑ孫まく
ゆうゝあるゝ民　門田　子町田　色羽田
寒毛の生るゝ所とにあらしろのかさねを洗る水堰の小田　音人

二十七　堇

きゝれくき　野へのきゝれ　こむらさき　わさらふ　つぶゝゝ　袖ゆつまん
白ふすゝれ
吾妹子うまれかくろれてやすゝれもをひけてつめセところぶと　よしれ

二十八　三月三日

桃の盃　色も花も碎　八重桃　久のはゝろ

川辺あるゝ鬱蒸のさゝれきたりろうゝ人のはまねをすれ　沖風

二十九　牡若

なきれたる　池のゝ　沢重のゝ　春こめく咲　白ふ川重
汀よさゝふ　三ぬま　や川ゝ　ツリやうぬま
夏ゝきうほやうぬまれくきれたるこのやめのそふを初き往すれ　定九

三十　薇花

ふちあゝ　ゝ山ゝ　ゝうえ　ゆうれを　ふりゝきれ　黒ねまかふ
松の薇あゝ　芽うけく咲　春日　伊よし
さかゝ姫のいと白ふのゝてり春はけうゝろ咲や薇乃きけのみ　白人
松うえにそひうゝうゝふ薇の芽春と春ゝ成まゝれてそ咲　人成

三十一　歌冬

さけぶ山ふき　しの長ね　きゝ入れし　ひゝふしの名　いたぬる
波よりかろふ　名ある滝　垣ゐにさけぶ　井手の里
後茶は茶あけゝれ　名ある駒の長ぢそふ井あれ山吹　夕雲

## 卅二　蛙

かはかはく　小田のゝ　すゝくゝ　ゝれ前　水は住ゝ　井あれゝ
古井のゝ　綾ゝ門田　このもかのもにかはく
名をきゝ侍かれ不ゝさてゝとと　名ある東成古井に蛙かくし　東作

## 卅三　躑躅

ちゝゝ　ゝちゝ　岩ねのゝ　こねのゝ　谷れゝ　かゝみゝき
ゝゝも沢　岩ゐれ数　ゝゝふ山
宿ゝゝてゝれ手の里の岩つゝ　尖とり　沢の藤をねうき　白人

## 卅四　燕

つゝゝゝ　彩れゝ　かくゝ　中成つれぬ　ふふすとゝ川ぬ
れとめとあゝふ　ゝゝゝれた
つゝゝゝゝも何　六ものあゝ中ゝん中ゝにゝゝふ橋乃ゆゝとゝゝ　ゝゝ人

## 卅五　雲雀

あゝふひゝゝ　寒ひゝゝ　れゝるひゝゝ　すゝ弥のひゝゝ　夕ゝゝゝ
ゝのゝゝ　雲井よあゝふ　長根とすゝ川　長はきゆふ
弥よ白ふ畑の茶れ落ひゝゝ色をゝまうにきゝゝゝゝゝふゝ仕　天長

## 卅六　暮春

ゝれゆく春　春のゝれ　春ゐれ　春成ゝゝむ　やゝひの名れ
花香のふゝゝ　まゝゝん春　ゝゝゝゝ　ゝゝゝゝまて

千金まろ〳〵とふる雪の日も一夜日とありに春ふ所有　よし人しられ

[卅七]　三月盡

雪ぬとぞめ　ぞろふく　入相のゝね　ちるれとそれたちとゝ
ちゝむ雪　いぬふる雪　この人数雪　そゝ成ゝゝにゆく
ふるにゝ雪　雪よびくせ

三月いつゝ立とゝちのふふ拾ゝけぬゝきりの雪よりみゝる　不埒
ゆふひも雨ゝの夜会すゝぬ立ハみゝれゝもゝ〳〵花のゝゝ　岡持
花ちゝて雪まれ〳〵ゝのゝふつゝち叩けゝく春のいとまこひゝ　光
雪ゝふねきゝゝ花ゝれ炎上戸をゝめとゝゝひゝ花をゝ　漢江

閒雲墨抄卷二隻之部

[一]　更衣

赤つ衣　ひゝくのゝ　せゝのたゝ　花ゝゝ　かさねゝ〳〵廣のゝ
花のゝゝと　ぬきゝる　ぬきゝて　ちふのゝゝのこせ
きのふれ雪　かゝまくわゝき　けさゝゝる
花の雪をわゝゝて雪ゝ雪ゝぬを拾ゝゝぬと人やゝゝゝん　正式
雪の衣とゝ〳〵袖ゝつゝゝふの衣れゝゝ雪ゝのゝ　軽人

[二]　首隻

外月のちゝめ　花雪のゝゝ雪れ　夜山の雪　ちゝのゝふゝれ
雪ゝれ〳〵きのふ　夜ゝゝゝ雪ゝ　夜やきぬゝん　雪と隻

若葉にも なそはらふ 蔭つくし 涼しさそむる
雲きれしきのふの酒れさめりしらなふかうかきに風まつるは 暁月
花ハさかさかりし大根とおりぬ辺松鼻ニ似たるふの横雲 金埒

三 卯花

さけるかきれなるに こゑるし 波ふし 垣のし 庭のし きのし うき
山かけのうきね 闇おとらぬ香 まことされし まかりし
山かけき 一むらさける 月影にまかふ
月雪と見らぬ葉躑躅に餅の皮むらふのきしにさらされな 直成
箱根山ゆくかきの花盛りおみちや文人ぶ川しひしく 素位

四 残花

ちりのこる花 雲のかたえにのこる 春山風の なそはらふ

咲こぼれたる 青葉に白ふ そこ見て白ふ なそはらふ
たるゆる花ころれな 雲をしのふ
花ハ根ニ帰る辺路の夜山に葉かくれもさらくるけり 紀青丘
夜山のさとられきぬにぬひうけし花ハ松葉の針さかけりける 橘洲

五 新樹

青葉に 夜寒立 若葉のころを 花のあと 木のした雲
ちけるも来佐 うたくるみとう 山の松むらさを
花の山包ひふくろの雲ふかく青葉おちりと成にけるかな 羽鹿

六 牡丹

まつか草 ふかみ草 名とり草 山白草 花のえみ
十日つて雲と夜ゝに咲けし花やちらかきあかみくさ 赤良

相花集を選文よりてかくのごとくなり　件のごとく　金雞

七　葵

あふひ草　のろもろに　世よあふひ草　かさねあふひ　二葵草
かゝ茂のまあれ　こすれあふひ　かさしあふひ　三葵草
名の名は鴨のあふひまあれのあふひまをもてうける物よりなる　はまぐり

八　時鳥

ほとゝぎす　山ー　かくしー　里のー　きてのはなに　名
のふたのひね　かゝるく里　雲井より　名所の月　あくまの月
れのう月　れちうもあく　一ーあるもあふ　ねさんそき　秋すのこえ
不のうよふのう　附しを白ーあく　むかしあのそ　今ひとあえ
名をもしに　まちぶ山　岩ゝ　あふは　山田のちゝ

後　伏見　むさゝ所　恋の品　あさゝ　きを里　小野
附名自由自在よきく里ハ酒屋へ三里ゝゝめ　二里　光
寺　名のきちゝひおれやはちすて矣ひゝ　ふよあく　ゝゝきに　三院院
あれゝふすゝおゝて乃附名雲の　つ川ゝまはきあゝちゝ　米人
附名浦てのあれもなれをもんりをせゝゝゝのて　橋物
初茄子花ちゝ里れゝゝゝきにちゝさゝねよゝ一日ハあけ　生新
れもにもゝゝゝ名ゝ名の名合ゝら　ゝゝきく　ゝゝゝき　金雞
新母子ゝ入さの出乃ゝゝゝに一口ゝにいまはえ　ゝゝ　仝
附名　ゝゝく里ゝゝゝゝ只一ゝ名の今乃ゝゝに　院院藩
ゝゝよ恨をあけく　ゝゝちゝゝきに沖ゝゝ　今の一色　萬未
名ハゝ乃ゝゝゝに赤乃ゝゝゝゝ　有設

九 菖蒲

あやめぐさ　匂ふ一　くふの一　彩の一　一の雫　一の雫
一ふく　一かほる　花一　池の一　沼の一　一えわぬ
のきれすに〳〵　のきにふく　あさられ沼
形改まあ〳〵めもくふはひきくんてあやめを彩乃妻一こるる多　未得

十 早苗

さなえ　一とる　一ゑま　小田の一　山田の一　民の一　子町一
門田の一　苗の小笠　あせきいる〳〵　山田のもげ　すそくかる
田子の浦　住よ一　井手
然の女も子苗とるあよい引義よくあ〳〵めや苗の小笠糸流　眉住

十一 照射

ともし一　一のくけ　一すふ　のこふ一　ちゑまの一　一の光り
又月山　麻のおりい　よるふ麻　麻すい　特人のつ〳〵　ふ一ひ山
二村山　むさ一行
蚕虫のふ〳〵ひふりはと葉麻のえてとりれ蚕よるるおしるる　ほしれ

十二 稗河

うふね　最川　う吹　かるを　ゆや〳〵　ふ川〳〵新　暁やを
きあるかるを史　稗川うを　大井川　かる〳〵川　高瀬川
もゝ〳〵川　宮居川
のませてい船〳〵たるせてとる魚のはゝふきかるかるぬけふる川ふ　二巻
世ゝたりのはゝ士乃小船のはふかてよると特い咽首れつふや興〳〵き　佐久る

十三 五月雨

さみだれ　一の宮　一の日をうるふ　のきれー　一の日をうるふ
ろろぬれー　河のー　みまはる　ほくふる　いてふる　ふるく
ひるほもあき　ふるやの彩　すれやらぬ　あすか川
まねの浦　ふるの言はー　たなびの岡　佐野の舟橋
布引よりふりくれる五月雨ひと幅むろく落る滝つ波　金鶏
初鰹あてーしよりもせやーあやうしと亦あぬ祇の五月哉　裏成
さみだれの雲は衣の要源をつかひはせよてるかく　法師　江往
雨の音千の天先とふりーきて五月の雨のうられてそちる　次丸
ゆくえの甚をけーさふ見よりもかて音はさみだれの河　後陽
彩近く雲さられと同ふ人のすれよもふてぬ汚みあれの比　俳諧精

十四　三重橋

あちそか　そかー　白ふー　白ふー　彩のー　一のむちる里　むさえこえ
むぶこえる　世くのうぐ　移る者　橘白ふ　たち油の香　むりを悪ふ
菓の大将とうそふてよけはまりくひつるのたちそかの乃彩　秋人

十五　瞿麦

とこふつ　白ふー　一の花　一の雫　彩人のー　ふてーこ
ぬまとふてーこ　雫れもけある　花のぬれる　つゆのやどるか
雫さへ白ふ　あーるの示　こやき師　長日師　赤良　行器
を花隠るタの雫れ折りにく弥りーつけるふてーこのを　漢登
あらふてもまる赤ーこかれふてーこのちをそふれてはをかれてそあり　白壁
すてーこれてひとう言ハたるくこれおもつるぬ川　示ふてーこ子　はこ人

十六　蛍

[illegible]

波の一　沒音の一　まくの一　分をうく　をのゝ光　きえぬるひ

書をそめ　いそぬ　宇治川　さわ川　あひ　うゝ波ひ

世のわれもれもほろる色かれや金く曇いけるくはくゝと　雅雲

名のゝ匡源氏の恩やうそれゝ光をゝりにしけるわうゝ　向

十七　水鶏

たゝくゝあふ　歌まの一　一のまゝ　かゝゝ一　一のこゝ

まゝのゝ　ねさゝゝふ　あるゝ　竹田の里

おゝゝゝゝあのゝゝうくゝゝ夏の又ゝをゝれるゝ　雪丸

十八　蚊を火

かゝり火　よゝの一　去川ゝ一　里の一　宿の一　ゝゝゝく

ふせゝのゝり　ゝむ草

夕ゝれい三陣の板の茅ふ打久て行ゝ乱ゝとたくや蚊屋ゝ火　羽康

十九　夏月

月を涼一き　あけゝゝゝ新　ゝゝゝゝゝ夜　みゝゝゝゝ月

出れへあくふ　ゝゝふ水のま　茅の中ゝゝゝふ　茅の根れ霜

茅の夜へ月のさゝゝゝゝゝれて殘るのうゝれ殘るあ月き　遊人

二十　夏卅

ふ川くきのゝふ　一ゝゝゝゝ　反孫の茅　反孫ゝ蔵ゝ　秋ゝゝの

屋ゝゝ反ゝゝ　宮ゝゝふ茅　茅の一けゝ

旅人もふけよ安達ゝ原丹よゝ花のゝちひるさけるわふゆり　智吉

廿一　蓮

たちすたあ　　たれのさち　　たちものまれむ　　ほのうかく
たちまれつる　　池のもちに　　たちのつと　　秀孫し
十三夜　盤のけさくえゆり蓮　　ちくとそく　　秀れ　　秋人

九二　夕顔

夕ゑれの宿　　一の秀　　一の秀　　さけの垣ね　　まゝられてちく
ちゝ垣れ　　ちるかうさ　　ちゝの袖ゑ　　うきねよかゝ
夕顔　　ちれのさうと引のちせ干　　郷とあつてちかうくうう　　金鶏

九三　蟬

せゝのもろも　　一のもろゝ　　一の泪　　ころれ　　むろれ　　色も濃き
ちれ風いかれと合歓の木れ孫ちやされ　　蝉の色〻　　景好



ひむろ山　　一ちう　　ゝゝの氷　　とけんともあき　　てる日もちうぬ
夜の外あう　　枝の下風　　泉山のうけ　　ひむろのたゝ〻
謎〻やかゝやひむろい石ゝ月　　うけてもさうにとけぬ　　ゝ

九五　夕立

夕立の雨　　一の雲　　ちゝ晴る　　明神のちる　　風ちゝ　　よゝるなり
山風ふけ〻　　笠ちう　　ちれ切ゝ孫　　彩の玉ゝ　　菜月もふひく〻
夕立の雨のあ〻ちゝいれんとて　　盥をちりに出〻　　ゝちゝ　　金鶏
天ゝロあうとう〻きけい暑ちゝて天ゝ　　ちゝ水をちくう　　夕立　　只取

九六　納涼

夕涼　　門〻　　雲の下陰　　うゝふ秋風　　このゝたすゝみ　　ちゝ門くむ
ちゝ山のうけ　　泉の底涼しき　　秋ちゝ　　ふ　　夏よちうれぬ　　涼む川風

見弦よりかゝる仁不弦よりたぶくゝと儀沢山の瀧て来くゝ亦 横川
あつまて解しかゝるをめこのてくむすふ清山の新そすゝしき 光
流と毋乃ふを命のせんさとうあさこうあくのりけけよけて 光

九七 荒和萩

おつちちく ふこつのちく こちに紀する こふ月ちく ふのこちに
こちに紀川 あちこの林 彼のちくあふ ちふして 麻の天ぬさ
あつのいれ あちの小川 たに紀 かあ紀 いすゝ川 住よゝ
ゆやくゝと山萩やすゝん素麺の名を流とる三隅の川浪 金鶏
餅よあさこふ鴨の川涼の夕仮のお祢ちく人の水辺白中ふ 光



# 周雲愚抄巻三秋之部

一 立秋

秋立日 秋いまよりり 秋や立りん 秋の色のあよる
秋きぬ あきたり色 風ちふ 雲垂初る 秋の初風
なよりてくつあ まこふちふ 雲けき秋 ちを紅のくら雲
萩のこふちく
はこりちと柳の一葉より秋風のよれちちてちちれぬる 英人
秋きに紀ちあ雨よこちく花てく人ちちる紀秋の初色 芙蓉

二 早秋

立田山あくゝのいろはもよ習ひけさ羽よ赤ゝぬ秋の初風 盤彼

[illegible]秋の三番叟うつそみくとゐ丸去のきよくあうやすこの世 [illegible]

三 残暑

のろあつさ 夏やうくふ 蓑をひとれぬ あけ[illegible]のこれ
秋淺き 夕風をまち すそぬ[illegible]
[illegible]稲の穂い出れと秋の[illegible]いまるくまにあるゆ暑さよ 遠方

四 七夕

あつのちきり ひとゝし 打り帳 あつ[illegible]のかし ほし合の[illegible]
紅葉あれそ かさ[illegible]のそし り合の[illegible] まちこしくふ
天の川ふゆ とりうふゆ ねひの糸 雲れ衣 くす糸
あうふ祝 うこのれ うこそて
南蠻の浪河をつる七夕れあふよいとゝにあ[illegible]一[illegible] 盛



東西よりつふ相撲の二ツ星あふい時天あ[illegible]一 まち 彦星
七夕のあふてよ[illegible]れ[illegible]合の[illegible] 光
[illegible]の川ふのひとりあまりを[illegible]あ[illegible]ん 猿田[illegible] 長人
七夕よ[illegible]子のあ[illegible]れと[illegible]母の帆[illegible]も 金[illegible]
七夕のそ[illegible]列[illegible]一[illegible]れ[illegible] 二十八宿 [illegible]
かさ[illegible]のつ[illegible]ふ[illegible]と土[illegible]の車 留せよ 定九

五 草花

[illegible]きのた [illegible]のそ[illegible]つ ほのの下萩 そよく
秋[illegible]き いとゝき おもあ[illegible] 仏せのれ[illegible]き 廉[illegible]
[illegible]やき彼 女郎花 [illegible] [illegible]
[illegible]やく彼べ [illegible]れよちきり [illegible]き [illegible]の[illegible]き 一[illegible]き

戸すだの落　そゝろく　初尾さく　尾さゝ袖　不にいろふ
まねく尾花　入野　まの入江　かるや　のゝるかや　屋の苅
ふちさゝ　かさゝのつる　ゆ素　さゝ門さの　しゝふ
一節よ白ふ

六　萩

ふり分る清ぬく秋風のすゝしゆゝけいせのたまさき　撥安

七　萩

吹まくらすゝの〻風よ仙人もゐる谷のしゝさゝ乃萩　仲塗

八　女郎花

をゝ多〻しさゝ乃べゝ不馬をせくよの遍昭ゝはるの切花　雄康

九　落



秋風の吹よつけくもいとすゝきうゝ分こゝろをたゝれ　ゆゝ人

十　蘭

風のまに不ゝろゝけくゝふちゝ尾ひゝのくまつてゐる人ふ　矢徒

十一　雁

たゝ門ゝ　たのむけゝ　天はゝ　雲井のかり　いゝゝ　こゝづて
かゝの玉つき　紙鳶の糸　月よふく　雲れたゝて

光陰の矢根ゝ尾のすゝかりまさ足ゆふゝ分ゝ乃尾　光
南京れたち月よゝ家一丁合ハ雲井たふゝれ門ゝものゝ　市人

十二　鹿

さをゝ　つまゝふ　をゝゝゝふく　尾の人の鹿　ふゝゝれゝゝ
紅葉ふゝ門け　ゝふ長　ゝゝ門師　水くきの岡　さゝ師

秋の野よりおく小男鹿の角おれいさらてもやゝ恋ぬらん　仲塗
二三丁さ紅よりゆる麻のねへたくのうれもうちゆやおく　雄香

十三　野分

の花の風　花野ちらく　草原をれゆく　ちるさゝやき
野分ふれけり　枝すさまゝ　枝のむら面
あらゝき強まて頬をふらゝかゝ野分れあらたくもゝ　よな気
鬼ちりる安達ゝ吹あれて野分ゝ胃れ足ゆあつゝ気　三花社

十四　露

乾つゝ　夕ゝ　一つけ表　一のゝゝゝ　むすふ　ひろ
茅ふにゝ　不せき　ゝゝく
ぬれぬさ花ゝそいとゝゝゝをきくて赤い涙ゝ　貴くされ　岡持

十五　霧

あさきゝを　夕ゝ　秋ゝ　一五　一れすゝき　ゝちのゝふ
ちゝく　こもる　へゝ月　りさ紅ゝゝ　足くゝ足くすゝ
足あゝ足ゝけりゝき岑を秋きゝ岑あふけもなくゝちのゝりけを　鬼貫

十六　撞

高のむくけ　ちその袖花　たく一日　日をいふ　むふはゝ紅
ちゝく　花のすゝく　高のすゝく紅　ちゝあき
もちあゝふむゝらの石れ坂よ咲　鈴不も見成いとひとすれ　雨什

十七　秋夕

秋の夕ゝれ　ゝゝゝく高　ゝつゝゝの夕雲　あきれあゝれ
こすえさひゝき　袖ぬゝ紅夕

ゑかき分るも淵にそれぞれうあくひの咲れあきろゆゑくさ　定九
菓子蕊よ花も紅ふもかるろ口脇ーされ秋の夕雲　芝翁

十八　的近

もち月の的　きり系のー　甲斐社是的　笑よ系ろふ　こゝひき
あふさろの板　雲井まろけふ
えのくあ川の初はるも乳よあつて使の首をきりつられこま　雄尾

十九　月

もち月　ろちろー　ーれろろ　ねまちー　あきちー　出るー
すやろー　山のえれー　ーれさふけさ　ーえれい　ーれ良　ーれ雲
ーの徒　ーれくま　ろくー　さーろふ　ちろも心ろめ　秋のま
ちろもこすろぬ　こちぬろけ　をえすて山　須戸　あろー



むさー弥　さろーふ　かゝみ山　廣沢の池　すえれ江
やくけやくたくえゆる世井をろーゆゑのえく月このけ　赤良
ゆ系ろれくえ切をくつふにとくまれ秋は仲まゆ芝月　東成
むちつ弥よ麻いあれとも十三歌こよひれ月まえまいろーぬ　はるえ
晴天の青砥た奥いふえんゆ庭よ入ふ千金は月　軽人
やくをろさゆにゆる浦は月ゆけとふれろーみゆまー　光
ろ月の桂男ろえーれて今もろけろむかあろ系葉　芝翁
まををのあと山ゑをひまゆふたまゆいて出ろあーのやは月　金鶏
雲の涼よぬきてをきゆくあまゆ風さけ出ろ名月の珠　横洲

二十　語

うつろふく　うつろふに　弥へのうつろ　をのろとこ　笑ろくれ

れ花くれ　泉茅社里　まの入江
をのれうら雪にちられてあくらけいをふくさ〳〵　光

九一　略

ちきのをめる　〳〵川沢
ふる　川　あさゐ社　〳〵せの滝
蛤ちりをちりてをさあれて時をうぬる秋の夕雲　仮盛

九二　秋田

小山田　門田　早世田　をくて　不あく　いるもれ雲　かりかね
いかをこ活もる　山田のふ
もろ母のよりる秋の漢田をまをるをふちをほ乃稲　常頃

九三　樹衣



かりころも　衣川こ　きぬるの音　妹ゝ川　麻の衣　槌の音
ちきよ沢ゝ　里れきぬと　小夜衣　月ゝ川
秋ゝ〳〵くふゝ〳〵ゝ　足埋れ拍子もぬけのかりころも　望月
麻ものをぼてゝ川〳〵花麻しきハかゝをあれ音ちる紀里　蝴蝶

九四　虫

まゝむし　ちゝ〳〵　ををちゝ〳〵　〳〵れね　れまゝ川〳〵　〳〵れこゑ〳〵
きりゝ〳〵　すゞく　こゑしきふ　かゝよ音する　ふるもまるぬ
むゝ〳〵れを　秋の野　野べのちゝさ　さゝ野　むさ〳〵神　主を里小野
大原や虫もさこねの宮ほゝ馬追もあるを織もあるを　京伝
夜ゝ〳〵ハめゝ〳〵かりを豆の野べ出のねをゝと中をゝをゆけ　夕雲
西陳ハちゝ沢羽生の山中ちををゝ〳〵をゝ　金鈴

九五 菊

きりぎす　きり〳〵　一のまくら　山ちの一　老せぬ一　一のさうつき
一のさせりこ　そのこゝ　ちよれ白一　うむろ一　岩ねの一　くふつむ一
八重さく花　あめのこゝせ　星の光　ふまうふ　とう油白ふ　菊川の里
うゝ孫川　吟上の名所　まくらの名所　百草の子秋ホと雪まそもめてくゝ　ほすう菊はさうの月き　美艶
ホとりとけくゝちよりてそれくゝ　くま崎名うつゝの菊の花　三和
白菊ふあゝふ黄きくも　然貝ふい北斗をさそふこゝとゝろ　古花
あうふうもいとそとくゝ　ほうまうこのゝぬ　光菊ふふ　井儀
をきまゝこんせる　和よりも尚世の仏あてよいまんこゝとゝきく　業人
作り菊ふへふ　孫とかゝ　先ゝの花をのべんゝあに社あれ　定九

九六 九月九日

ふゝうり下戸ふ　吳又のきゝれ　酒ふう　斗のめやうゝ人や　吟雲

九七 葛

くすのた　まくはむ　くまのう　風　人はの秋ク世
ふつく　うゝかれ　ふふくす　いふゝ師　ときいの杜
伊ふゝうゝゝ恨ゝ葛のもれ風　ふあてをあつせさうゝん　九家

九八 紅葉

ふ川めゝち　うはゝ一　下一　中不の一　ちゝ不の一　岩れ一　ふ花
山姫のふ染　くゝ後　うはくゝ　らゝふ　りゝは　ふふれふゝき
立田姫　葉めゝち　ゝちる品　ゝる田山　あゝゝ山　ふ向山
めゝち葉ふふゝ不一　ふ有ゝ　ふうゝかゝ孫とふ人のうゝん　漢江

独ねてねられぬ夜の紫の思ともしまん林りん乃涌　橘洲

【廿九】　暮秋

暮る秋　秋の暮　水末れ秋　長月の末　とまらぬ秋　久るゝ秋

秋の名残　名残をしき　秋もいぬめり　ゆふのわかれ

秋ふかく染ておりしとおもふかこ志らく袖としおるゝ錦哉　紀住

【三十】　九月盡

長月の哥も長夜の封しめをおれハいふよふゝまれ月おもて　猿人

あすよりハ冬の入る朝またおきなれ不餘まあはれなくれ哉　唯住

ちりとめも捌すの色れ白露を志もにむすひて行くたへ秋　光

# 閭雲愚抄巻四冬之部

【一】　初冬

冬のはしめ　冬のきたり　冬きてな　冬を志らせる

初雲月　ホかうしー　冬そ淋しき　ホそむる　初しぐれ

人めもかると　初めれをはそむる　きのふそ秋そくれし

冬こもる　ひらく埋火

貧公の神か出雲へ立とちやよふもこふも冬ところかれ　飯盛

格子ながら声志はられて小風のおんゆきも冬乃つゆくるゝ　揺安

秋の日もつれ十月とけし揚をやのあまやら朝もさむなり　金鶏

池水に朝の姿居たてよくおしむ鴨居れ冬乃入くら　光

二　二夜菊

木のさちふ　めづらち貴　木のたちふる　霜のくちぶ　くれ紫
附句まつふ　木れを残さふ　花とうむむ　百もいろある
霜枯たる菊　風のしかしく　附句ときほふ　木ちらしれ杜
わく山の紅葉ちりぬる梢よい拙ち寄りよう　和ようさ寒ふ　仮盛
木ちらしれ柳下ちる落葉ふ　てん掃除町い名のミ〳〵り　光
藤くきけい落るまれこのすちまや　嵐のかゝる月ようて　仝
木ちしこのさとへいともま約針ようふ月ようちふかるち　翁　掲阿
人てふ　木葉ふ衣をふたとうても　糸ちらぬ追おとう風　雪丸
ちり赤し紅葉ふのあるれ　紅葉ふのちちしる屋の風ふ　三和

三　殘菊



殘るちらきく　霜くれの色のきく　附句や淋　霜もひとりこにく
そあらふふ　あゝしくのこふ
霜枯るまさらぬふ一本てりてんてちに月のしら菊　はせを

四　附句

そ門ちれ　村し　小夜し　ゆゝし　ゆるく　袖のし　彩むの
山ちうする　うき雲　いてふのしれ　木ふしてる　ちれ乃ゝぜ
まる羽山　あゝし山　ときら山　いく田の麦
まり名の一そんせん　しふ出に附句をさそふ風ふちうあて　雪丸
鬼あらぬ神のなるちらしれてせんてすべき日和てたふし　業柱
ちちらまい星二つ三つんてあるふふとふりれ村しれあり　横行
小夜しれるうんちうと殺ようり蕾ハ中ふ生てちきれくま　掲阿

小ぬかほと附る宮ゐ山路のおもかげ紅葉ちやとなん　金蹄

五　霜

霜ー　夕ー　ちりー　ーれ　ーのうちかぜ　こがきゆる　ちく
むすふ　ちる　ちれのまうき　庭の紅葉　ちれの下紫　ちく霜の白紅
あるかきの霜

赤ーの霜ふを庭ー吐もそろくと赤もつつくる庭の面ふ　雲鬢
皇の生きつる歩つめる紅ちれ霜の庭ときれかれいこり　猶昭

六　霧

あら庭ふる　ーふりしく　玉こー　ーまるあふ　名ちーふ
ちくる　ちる　玉ーく庭　窓ちくまる　まれのつくや
あれもそーー不破の関まるる後ゆとるれあーれの玉ちれいこて　橘洲



七　雪

ちれあき　白ー　ーれあーる　ーみ曝　ーの夕れ　ふるーくー
かーらのー　竹のちれー　ちすー　庵ーれーー　ーのむーきえ
ーちちちふ　ーれ山本　まちふーるけぬ　ちきちーーふふ
松のちれ　あとつる　ちふ人の情の路　ふるふむ　けぬら上り
ちーーとる　ちがね　初ら　雖汐　富士の根　ちー弥
弱ちれ白砂をふませーと制の河乃雪れ夕ーちと　光
ちふ人の情のふきのちれちん雪に孫きーふ迎ー路　雲鬢
降つる雪を遠ーよはふーらせて巨燈ーちれ夢を人　よわけ
おちれ後燈籠の歩ちふーにちれーとふかるれちー宮　音人
附ちれ降つけとも後ーちる附むれの花ちれむれ花　酒船

うつろき其場をしけるおすをや殺らえこに雪をんを行　金成
雪の日ひとちゝをあるはおらら巨燈よりまに殺て立つき　伊勢浦
雪人まい代まのりそうかれいや氣にをしふまめ立ちろ　小ま弘
降雪を殺る毛のさとくをうあしにそむうれもろうる紀　仮盛

八　寒草

うれあし　をかれし　みくれし　をもうれ　しれんをふ　波のむうし
波立れし　へにのし　雜波に　うし波に
をれたけれつくくもつよれあしのをれをきふあしてかれうちにろ　酒壺

九　冬月

氷る月氣　霜夜の月　月は氷　みく氷の月　冬氷の月　冬氷の夜
をあよやとる月　月は桂はうれぬ　みく氷の月　冬氷の月　冬氷の夜



かををうれをうる月のすふとををを山松乃をれてきるくく　橋川

十　千鳥

さよちとう　むうし　ををまし　ううし　をふし　をふし　行のし
孫さめれし　さうくし　をよひうに　塩風よを川　浦ふふしくもふく
波ア　四ア　波波島　ふうくがく
をてくる波のうは太刀川はれをうろへてとふちとうを南　橋川

十一　氷

うをとうり　しをよろり　むをふし　しうさめる　さゆる風こをふ
けをれし　しのとちめ　波れし　谷のし　夜はまたしふ
ひもかくみ　しをくる　をれくもし　しる上　波らく
山姥も冬はれれをうをこと波津せぬひやとうる布引　智恵子

[illegible]神のおちもあるらんなどいとをかしにあのらぶむれを　金鶏
をかされぬ水ハけるも　梓弓あてれつまさまはうはめるなり　時子

十二　水鳥

かも　をし　みゐ　をしれも衣　波の花　むれゐる　さく
をのふすま　うきねのとこ　ちひ羽　入江　浦のうきぶ
ねこぎ　羽ちの雪

はるき羽の雨おちらいとふうたらふスナ行の門乃をけ拾四　岡持

十三　泡代

あろ丈　あろのり　せのあろ　あろれうら　あろの原
宇治川　ふるゝ川　ひとのあらふ　ひとの名ぶ
芸虫コ　似ゝゝ宇治の泡代ち　取ちゝゝ　ひとゝゝ　ゝゝふ　丸家



十四　神楽

神拍　立まふ袖　ちあゝて　あさうゝれ声　榊葉　うふつる袖
まさ記のうゝ　夜れて作　ゝれ夜れ屋史　をゝ衣　社の志めふい
ちゝうこ　生日　八幡　加茂

いかゝ人も其ゝ紙の引ゝよゝとあゝ面白とのそく取ゝゝ　素解
小夜文てうゝふをきけハ色も見もかんゝ入ゝある素の取ゝゝ　金鶏

十五　俳名

ゝゝ人つる二世の俳　ほゝけのうふをつゝ　月コ作りつゝ
言とちもにつゝもきあり　法の師をむふ
ちとあゝとゝゝあゝゝゝ此法仏のうふかいゝてゝ小をくつくさん　白主

十六　雁金　狩

たゝたら　たゝふのうら　まゝろれさう　よあれのたら　あゝたら
たゝ引すて　たゝ人　結ゝ石　たゝ所　たゝりも
うゝ衣　たゝのり傳　重ゝもまゝふ
芝れ京君を志りゝよたゝかゝ後ゝふの重れ屋とたゝふちゝう　渭明

十七　炭竈

すゝかま　小弥のゝ　松のゝ　ゝれゝり　ゝよれゝ　炭ゝ義
小弥の里人　大京山
山のゝれゝゝふゝ炭ゝ山炭ゝ紀も芝彩の根きゝ義ふきゝゝてゝる　水細
れゝ人よいあゝぬ山重のゝれ京ゝ炭ゝくゝゝあゝの白あゝ　金鶏

十八　食

こゝすま　あゝゝ　あきゝ　後まれゝ　月のゝけよあまゝゝ

ねやさむゝ　さゝ切夜
夜いきてぬれゝゝひゝのゝひゝきいこやゝゝきれかゝゝすまゝゝ　常恒

十九　埋火

うゝゝ火のゝと　重のゝれゝゝ火　歌まれ埋火　むゝふゝれゝゝ火
うゝゝ火れあゝゝ火　ゝきゝこれ　まゝゝゝ　祢足れ友
埋火の火ゝゝと重ゝ炭（字とゝれ重ゝすゝをつれゝくゝ　物更

二十　歳暮

ゝれゆゝゝ　年ゝゝ　ゝゝゝれぬ　ひゝゝをゝむ　つゝゝゝ
こよひ斗のゝゝ　冬の日ゝ　ゝゝゝといゝく　老のさゝ
重のゝゝと冬ゝゝく　ゝゝれゝゝ　ゝゝもゝゝひゝきゝ
あすの春をまれ　花よちゝつく　春の傳　年れとゝまれ

まハりらん　年ハくれけり　としハ暮る　ちくちくとつもらぬ
としの末ハ松山　ことしもくれぬ　春をまちかね
ゆるしハ尾張のけふの煤引の一天下とてありけるか　金埒
ちり塵のすかひらの声もさまやかにてさもしすれはけりて　閑持
宝膳の仕舞の臼の一杵とともにそ白かとしもつきたれ　阪登
一年のおわり大根に掛ゑとかゝりて見はきもれぬとさる　金鶏

九一　除夜

福ハよそ鬼ハどうても節分ハまめより外ハ事ハ鍋かな　査烟
鬼ハ内福ハ外へと出しともとしひとつとしとりは世はもちかな　雄長老





一　恋

恋すてふ　しのふれハ　こゝろも　しつひぬ　わかひとり寝
あけのこゑ　いそてなふ　つゆとも　うちとけぬこそ
うきやく　うつゝにもわすれぬ　いろに出にけり　つれなさ
ねもうけの　おもひねの　ねぬひあまたに　ちきりして　とへうらな
よしいまハ　こゑとつくしても　あくかるゝ　いきて甲斐

憂世をと人よりいかしさよ袖の火ハあらさすけれとも　光
ものいはぬむかしに今ハ引かへてかくまて君をこひ渡りけり　市人
うき人を思ひハ世の中のかれにまかるもみなけのあらそひかな　世次

たゝみくと恋の保ゑ人志門むこ君ゑ同のとれ〜〜ゑに引まゝく　仲任

二　初恋

こひそもれて　こひそもる　入初ふ恋　こゝろれ初ふ
ゑれぬ恋侍　初花深　恋ゝれまゝな　恋の初〜〜れ
只ひとめゑ〜〜ハ初歌の山をゑ〜〜れ〜〜ぞ門と引〜恋風　望月
ゑ〜〜も人のゑる目をぬきあ〜〜ゑゑ〜〜ゑ〜〜ゑ恋の乃芝　陽門

三　忍恋

志のあれハ　志のひね　志のあよ文ぬ　人〜れぬ目　〜のふくさ
〜れふのゑ〜れ　志け紀人目　〜〜ゑぬ井　いゑそれゑゑ
袖の尾つゝ　人目つゝみ　袖のゑ〜〜
我命あゑゑかゑ人き志ゑ〜〜ゑハ思ふ戸ゆふいきゑゑ〜〜せり　仮盛



盗人ゑ足ゑ志ゑ〜〜れゑ〜〜祇ゑ〜〜ゑ思ひてゑ〜〜ふ恋のゑ〜〜ゑゑと　掲例

四　不逢恋

ありぬゑ　あゑゑゑ命　かゑゑぬ井　あふせも〜〜ゑぬ
ひ逢ゑのゑ〜〜ゑむ　ゆひもれゑけぬつゝき　あふゑゑきり
家ハ志ゑ　君ハ志ゑ人ゑ〜〜氣のゑ〜〜ゑれゑ〜〜のゑゑゑ〜〜ゑ〜〜き　住虎
逢ゑれハゑゑ八卦をゑきふ〜〜に人のゑゑをゑゑ〜〜ゑゑぬふ　光

五　待恋

待ゑ〜〜ひゑる　こぬ人をゑ〜〜門　まゝ〜〜つゝれ　こぬゑ〜〜ゑ
逢りゑゑ　まゝち山　まゝ〜〜ゑ　まゝ〜〜ゑ
待ゑ〜〜ひゑ逢り月の新ゑ〜〜もさ〜〜ゑむものハ志ゑ〜〜ゑゑゑ　伊俊補
隻の後れゑ〜〜ひゑ氣ゑ〜〜ゑゑ〜〜ゑ〜〜ゑゑ〜〜ゑ〜〜ゑれ〜〜ゑ　一調

六 逢恋

[illegible]まくら　あふよられぬき　枕のちりをちらふ　ちるやひも
[illegible]　あふよの夏　人もそらぼか
今そ[illegible]ふそそるよの王子分いつもに逢う今れつ[illegible]なりとは　横河
抱つけの扇やりくるか君の肌今まそ[illegible]　仮寝　後撰

七 初逢恋

[illegible]　あひそめて　又をあひえん　かそ[illegible]
[illegible]　まちえしちきり
[illegible]やかとくきたりて待るよ[illegible]初ねのりふれとそそ[illegible]き　有風

八 後朝恋

[illegible]　まくらのとを　袖のうへを　けさ[illegible]



[illegible]　袖の乾秀　夏の家
つれ[illegible]伝よひ[illegible]髪けさ[illegible]　未詳

九 逢不逢恋

のちのつ[illegible]　一夜[illegible]　かそるちきり
[illegible]て後つれなき　つ[illegible]分　[illegible]　待[illegible]
移り[illegible]

十 猿恋

[illegible]　[illegible]　うきねの袖　[illegible]の月　をきそり洞
[illegible]　一夜[illegible]　[illegible]　[illegible]の[illegible]夏
曙をつ[illegible]　かりまくら
[illegible]の[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]人

十一 思

ありてふるかひ　うきー　あしー　おやかのよ　むかしかたり
あもぬー　つくきー　しくしー　しー川　むかしかたり
いたぬかひ　ふよ節ー　しみちく　しれちく　かぬ人をかの
あめひくきたちう文ー　あしかひの百貫と月よハ又てぬと　言葉
かひ川かひ人ちうにかのいあ　ふりひあしまや　金鶏

十二 片思

うちかひたる　かぬ人をかふ　あしのしかの　あひちうにかの
つくをしのふ　うしかのしれ　あれも人をれかぬ
ふるをとうかあふてへちまう　かぬ人をかふうき　恋人
一たいはたうかれうかひかあるきと人ちしまや　月守

十三 恨

うちかき　つかうちう　うちうにようう　うちうにかひ
まちうちう　うちうしかや　いたぬうう　しけぬうう
はあちうかひてちかりしか　葛れちう侍のうちうしうう　岡持

十四 角恋

まちうぬ中　ふく風のうちう　うの名はきけし　めのしとき
待ちまちのう　ちうしうかひかる　よそにはは雲井れう
行よのうすてすうかハ耳しぶのうすたちきうとうぬてしれね　成丈

十五 見恋

又ちうう　うし侍　角紙の月よ　よそにのしうる　ふれうし紙
死の侍　あまれうめ　月ひてうう　ちうにうる　ちうしまた

九十九取通ひ一人の足つるやうあるてこれはあるをぬうんと　酒柏
人目よをつくくと足る新古五に名くの外れ穴やあるうん　雨付

十六　尋　恋

たうより　うらめつて　みそそ者人あれ　そくしー人の俤う
杉くそる門　ちるーの枝　たうよる　者人せよ
そそ世ぬ人の古きう雀うやお宿ハどこやそ足入ヒも　珍光

十七　祈　恋

つヒあきといのう　ゆうふれき　くけていのふ　いのるかひあき
弁ようむ　うめそをく弓　あひけという　弁やしふ
者ゆふ　ちわふハ　むすふの弁　者紅　三騙　初康
いうつちのか成よいの足うひあうんあきれしてる成ようん　俊満

十八　別　恋

つきうれち　うれの油　つれひつる　ふれの洞　うき別俤
ちうきれ別　ふきうれ　きぬくの油　ちうね　うふさうく
ふうれ成　つきぬちうそ　けきれつれち

ふあきーふそうれんのふきを情うふよ只つれるふにあうきれうみ　雪丸
真つきてうるひハそうにふーー君ちたぶんの重れあけれれ　金鈴
ふそそく別ヒの只れちうるれや前ハ月ほしううれる　服盛
俤つあくたふれうう形の別俤ようあうれうる　枝鞠

十九　名立　恋

名よ所　うき名　おき名所　世よのうくうき名　仮うれ名
あさ原の所　いろ名　うき名　うゝ衣　うろ名
足初て　時よりこゝハぬけられこうき名外ハ　こえよるうか　服盛
ふりみけ　えさの所やあやしきうと　えてする　今れうき名ハ　金堵

二十　弧矢

のれ　うき糸　おゝこうにおうろく　世よのる泪　人目をみけく
人めよ　おゝ　えよいろ糸　今よろうるうき名
足出さる　狐の尾　うるゝきハ歌　忘れすたまれめれ　ひゝ　証積
名よこち　生れ抽ハ合打　うゝ　やふこうちまてすれ　定規

二十一　場点

秘ふ所　点　うゝまれみのかゝ　点衣除まれ　紬ぬれまさる

ゆえまさるおうひの花き本　美まさる泪の川
足てハ行　うゝ　所れ　こそまて　おちもする　やや　中栗

二十二　変点

うるこうろ　そのまれうろ　うりろふ井　もとめつうこたて　久糸
なのむんれうろ　いひ　にうれ
糸点ハ志賀の郡　れ行よいひうり　そもかうこまて　佐久留
かうろれうるこかるうねハ外よ糸引　人やけるあう　義　ふれ

二十三　久点

おうひてうゝふふ　あをへてつゝき　おうゝ人て　なうきつゝき
ゝ人てもうひるき　いゝ月を五に　ゝゝせとる
三年まてけりぬ点のうぬけいまれ　往のひふこうれなき　設定往

八四 近衣

ほとなき中　あくふの紅花　ちるもあり　ちるもしれぬま
あくきれまちる紅中　人のひとえ
秋の夕なあひ基よりえ出されぬい君ら近衣の切てたくぬい　定九

八五 隔衣

かのふ人のかよ多くそあるとも　夜とへとも　ふ〻えふら　月とてふて
人よ多くそらく
あか衣〻衣よりもまも解れ色ぬ夜まとも中ふ去ぬて　中栗

八六 忘衣

人ふつもふく分　ふされ水　うつれいふる　人ふふ色ぬ
ちきりふ命き　伏ふ〻れ屏ふ多ふ　秋れ扇　人の秋

人のふふさ　ふくれふふさ
かよそも人いふ多ふ多ふ四ふれ赤い花のよれそふふき　古文

八七 絵衣

かよひ絵ふ多ふ　夏絵ふ衣ふ　あふふ中　ふふふ多ふひ
赤のふ花ひ中　ふふふ中　今ハよ衣ふ多ふ
中絵ふ衣ハ何とふふこ縄ひくめふふもふれ四ふ多ふ　某人

八八 老衣

老の分れ　いくほふの世ふ　かふふの雪れつのふ分のひ　ふ四れ雪れ
ふふめふふひふき老　老その衣
赤花ひふけ〻用ふ四れ遠ふふの多ふ　ふ多ふ老ふふ多ふ　尺磨

八九 幼衣

いまをさか　まさむすゝれぬ草　茅れもかくよう　うゝてゝ
ひやふ松　なてゝこ　つゝむゝさた
きさんゝて附よもたりぬ素兵ハ五勢し人の芸人をまん　村竹

三十　等思女人兵

ふゝりを目ゝ　ゝよゝふゝ　ゝよゝ人てよゝ
ゝゝふゝゝ　ゝゝふゝ二人も須ゝあゝゝ　美小歌家を這深る身る　楷湖

三十一　思三人兵

いゝゝゝゝ歌れいゝ人ハ此美九分をゝ行みゝて物ゝゝゝも　古表

三十二　寄天兵

あまゝゝ　雲井　ゝゝれゝ　ゝゝれを　雲ゝゝひち
面白ゝ有頃天まてのぼるゝと兵の山伝よゝゝ兵ハ世ハ　ゝゝ人

三十三　寄地兵

あゝゝの土　土さゝゝゝ兵ゝゝ　ゝゝ土れゝゝ兵中
素兵ハ土鈴ゝて仰ゝゝ名ゝゝいれてゝゝ世ゝも入ゝゝ　開持

三十四　寄月兵

ゝゝ夜の月　待宵のゝ　立ゝゝゝ　逗の月　逗夜のゝ
供人の人ハ秋の宮ゝゝゝやつきのゝれゝゝたのまれえせハ　晴嵐

三十五　寄雲兵

むゝゝゝ　ゝゝゝ　ゝゝゝれゝ　ゝゝゝゝ　夕のゝ　胡のゝ
ゝれゝゝゝゝ世ゝも分をゝて兵ゝ山のゝゝれつきたゝ　猪雄

三十六　寄風兵

風のたゝ　ゝゝゝ　ゝのつて　ゝゝゝゝ　分ゝゝむゝ

ゝ今い風の弟よやいのゝまゝ同し様ま君ゝ作ぬ奉く 槍例

三十七 寄山点

いゝ山せ山 あゝ坂ー 去のかー まゝちー まゝちゝー

久さゝ〳〵ゝさにちゝとひれゝ多つゝゝ山とあゝまて しゝれ

三十八 寄関点

実侍の弓 名れそゝれ 人の実 いまそのー あゝ坂の実

虎よゝを狼よゝも れそゝしゝや吾通侍の実 弟奉侍

三十九 寄火点

むゝれた 乙のー こゝゝー ゆゆゝあゝ きゝぬゝ

石ゝそゝゝてゝも乙せん赤ゝ大の出ゝゝ君をゝそ人 引方

四十 寄小点

りゝ 丸のかゝれ 山の井のれ ゝけひのゝ つゝれ井のれ

まんさゝれれゝいせねとゝの中ふゝむ返ゝれふまめゝれ人 鬼丸

四十一 寄本点

赤男ふ人い破点の松ふれやすれゝ姿れ様を見ればく 疎人

四十二 寄竹点

まんちくれ人の竹をゝちゝて人ゝゝせゝれゝて松のひゝふ 原俊

四十三 寄名点

はゝ丸ふさゝ今青もひゝゝをふすゝ池の引まれ山ゝ号 対名 与布祿

四十四 寄獣点

ゝれゝあ紀人のゝれあゝ 鱈ゝせんゝゝけまれゝて松ゝひゝゝ 槍例

四十五 寄魚点

はるゝにあらずすべて芳んの涙なれと松魚のあさまくく立ゝる　義孝

四十六　寄玉恋

書わくる名ハ下和ゝ玉章ゝまさうとゝ幸れるゝ　味人

四十七　寄糸恋

ゝとゝ久しくとけゝと君ゝかさいとけぬゝひとゝつくく　行能

四十八　寄硯恋

君ゆへ硯の海ふしつひゝも墨の余毛あゝりかえゝあん　重基

四十九　寄船恋

恋の海浦き中ゝも舟玉を風のゝゝぬゝあゝいのゝ舞　吉風

五十　寄弓恋

ゝ手弦をひけゝ人目ゝしゝげゝゝいゝとゝ引ゝもゝさゝゝゝき　見能

# 閨雲愚抄巻六雑之部

## 一　暁

あゝつきけゝね　ゝゝれゝ門弦　あゝ月の月　ねゝ先の歌作き

恋のゝめ　夜をのこし　ゝめけ名ごり　さゝ今しけあゝ門影

山ゝゝゝ　撲雲　ね先の袖　雲ゝ明り

世の人ハゝゝ出るゝの暁ゝ小ゝ人ゝゝてぬゝとゝゝあゝゝゝ　金鶏

ゝゝ原ハ閨のゝ門てゝ出ぬゝゝてくゝゝゝゝゝゝゝき生ゝゝ　越　咽人

## 二　松

まゝゝゝ　ゝのゝゝゝ　ゝれてゝつゝ　ゝのみゝゝ

ゝゝ世のゝ　ゝゝゝ世ぬ　こけむし　言砂　ゝゝ山　生れゝゝゝ

うふ人のみとりとよくふる老松大まつ　万葉
うへたりしあらてふれのおひたちは枝さ二階も三うんもあるそ　中栗

三　竹

これ竹　かるこ　むらこ　おひろの　うきふし
枝ちげそ　まとり竹　ふしそ　秋篠の里　ふうされ里
をき者そ　むらけあり　神代岩竹の根うゝ子めいるふく久ん　左近

四　海

うゝうゝ　あうこ　ようれ　つる川　あうそ　うよ
こ多　秋あき　久あれ　塩風　うるめうふ　仲津うを
あにたれ　いせのこ　いづのこ　よされこ　うゝうこ
きれこ　まうゝのこ　あどのこ

ふれそうあ者きはのうへて秋のわさうそうちまう歩ぬふ　苅安

五　山

ゝ引の山　八重こ　よそのこ　ゝゝこ　わくこ　奈こ
高こ　こ原　ふゝと　けゝき山　こふとゝろ　こ弱
こ又こ　くさあるこ　このなふた　こ里　こ人
一合うゝ九合うきり此富士をそなと三くの山とふうん　近左

六　苔

こけむに　こむろ　これそとり　こうゝ川む　このちくあ
思そこ　思ねけきこ　書ねうゝ
催うゝかくかさねきせん　をしゝるもちゝにいるねのさけれ衣ハ　常恒

七　雲

まをつふ　ひをゝ　ちゝ　ようふれ　なのゝ
霧の毛衣　友つる　ふゝせれ友　むをみる　天とぶ
万れんの亀れよりひよゝゝふ兵まゝ九子累ゝゝのゝ嶺　撰安

八　野

野へ　ゝりせ　ゝ沢　ゝ井　芸のゝ　友れゝ　秋のゝ
冬れゝ　紫ゝ　飛火ゝ　さゞゝ　入ゝ
梓弓入野の草わけしゝ幸りなゝりをこれと乱ゝゝ家も陸　万九

九　潮

潮の糸　ゝれゝゝ玉　ゝれゝ　ゝつせ　ゝつ浪　蔦ゝきり
書羽の滝　をとなゝれゝ　ふふれゝ
むまんゝりん立てもとにくにゝゝれて蔦る滝れゝゝ糸　有風

十　橋

かけゝ　ゝゝゝ　ひとりれゝ　里の板ゝ　たふゝ
宇佐ゝ　ゝめれ岩ゝ　おゝゝれゝ　ゝゝふ　ゝける
津の国れおゝゝの橋いゝゝ年ゝも分ゝむ人のゝりかゝれり　ゝゝ人

十一　関

せきぢ　ゝれ戸　ゝ屋　ゝ宮　ゝの春ゝ　ゝ海のゝゝ
戸さゝぬ代　人目の関　かよひ路の関

逢ゝゝゝかけふ衣の関ゝゝを入て袖ゝゝゝれゝゝをたゝ　変袖

十二　別

たちわふ　袖のわれ　ゝするゝよ　かゝりゝん　ひをれ別路
おりひゝゝ　すれゝほゝゝん　撰り人

り人を今まで石と杖ふ分もつれるよてはなく一里はう千方里
戻つて石子里の馬もあれうふ列うく人のたるむけません よばけ

十三 接

ゆひろろも こ接 こね これ者 これ女 こ心
松ゆ接 ゆろろ 者ろ ゆまねの爰 まろふし
接いたく切れ竹のむく雀とゆりていぐちとまりてろこ門 よこ人れ
江戸を出く一イ二ウ三イ四ウ入日めに鞠子れ宿ゆ泊るゆ よこ人れ
川留にあふく歩ふろ荘ゆよこよん西ふく名所ゆそこふ 元祢

十四 田家

田のもれ居 山田の居 うり居 田井れ居 かゆ田もれ
つふむろ あせつふ すそれ田井

人ゆろをかくめる世話もおうろたるふのたるかれ九屋ハ 歳良

十五 山家

山すゆ 山ゆの居 松の下居 おをれ戸 松ふけふ居
ゆむのゆく〳〵 うき世の外 瓜木の居 ゆけひのゆ門
彩もの山 むくらの門 かゆふ業人 山人のゆけ居
糸ほとに居る清水をむすひて命をつふく山のしゆ居 查細
清世をいけふく すてゆきれ孫教れゆる人もあき山を海ひこの松 満九

十六 老人

松いふく 松の浪 おきおけひ 一
うられ雪 ゆふふの浪 元ゆひの雪 松ゆてよゆるむしゆ元
老の坂

[illegible]の[illegible]と[illegible]と老たて[illegible]今はみ[illegible]ちも[illegible]ー[illegible]かりくるて　有風
[illegible]ぐこ[illegible]せのとろぬいはよつく行やそ[illegible]ちー[illegible]やうめる　仝

十七　遊女

うかれめ　うかれつま　一夜つま　あもれめ　たはとあきちきり
傾城い月雪花の三つふんて[illegible]つかりけをよ[illegible]みはく　[illegible]
[illegible]こえのうぬよりおもあ[illegible]ぬ[illegible]いれたのう[illegible]ぞふのつるき彩造　赤良
[illegible]て此皮をちる人のせわせよてろもてうをふ[illegible]くれこびうひ　岡持

十八　王昭君

あ[illegible]ー[illegible]ろ　乃すうひく琴う　あ[illegible]れうみをあむ　あもの
ち[illegible]ー[illegible]みの紅　う[illegible]ー[illegible]のうう
[illegible]あ[illegible]ー[illegible]ろ[illegible]たうう姿[illegible]いうけせ[illegible]人のちくよそ[illegible]ろる　[illegible]

十九　楊貴妃

[illegible]きうあまれありう　まれろ[illegible]ようて[illegible]ー　[illegible]ときふ[illegible]ー[illegible]
とく[illegible]ん[illegible]くあれまろう　ときえ[illegible]人
かう[illegible]ー[illegible]ひ[illegible]比翼の羽いぬけく花ちひる[illegible]ろき　高薮

廿　夢

[illegible]ろあ[illegible]也[illegible]　[illegible]のうきは[illegible]　うそねのー　さむる[illegible]　[illegible]ー[illegible]
まち[illegible]き　むすふ　[illegible]ちそぬ　[illegible]ところむ
[illegible]ろあまこのゆうよねーよそ[illegible]先[illegible]あき[illegible]をこそ[illegible]れ　杜[illegible]

廿一　年常

あ[illegible]ー世　うとれ世　[illegible]ー[illegible]き燒　[illegible]り屋[illegible]れ燒　あき玉
きえあ[illegible]ー人　ついより[illegible]　うきうれ門出　[illegible]べの[illegible]　茅[illegible]

未の雪のとけ雪　舟居

子金のおりひをあせ〜人うたもつつら五つんようる世ゑ井　友信
ちそそよあくまの祢や孫ゑ皿つあよハ野べの中ゑ月ものとこ紙く　紫笛

九二　寺

山てら　野ゝ　ふるゝ　入れのう孫　ぬゝれ夢　法のちり
きゝつむ　のりゑ死求　つゝ　むくわ　墨そあれ袖
とり〜火も消てよある古ちゑ形ようゝ入るなゝつきゝ入安
山ちゑ月のタくれきてゝれい入用のうもよ掛ゝそはき寄ゑ　ゝ

九三　神祇

弥のゝます　夜居　ゝ月ゑ　玉ゝき　ちめふい　白ゆふ　きね
ねさ　そそゝ　ちゝゝと　やゝゝゑ　ゆゝして　掛　えけゝら

えむ月ゆき　仙とゝあれまは
廣前のよふゝれんゆゝれあゝてゝちねと志ゝ紀男やまこつ那　生新
神玉のちゝゝれ社とゝやけゝらふとゝあ野良ゝれゝゝ生下ゝちる　金鶏

九四　懐書

うゝゝをたりふ　ゝゝかゝ　むゝ志のふ　ち紀し月見をれりふ
ちをちゝふむゝし　ちゝれふゝと　おゝれての世　月のむゝし
老のむゝし　志ゝぬむゝし　おゝゝにしゝふ
老ゝ月のはふゝをふてく良し〜きい場といすれし昔なゝけゝ　金鶏
男をもゝゝきゝるゝい昔ゝく今いかくまて翁さび　白玉
力ゝちゝ尚ゝちゝちゝちはよゝ月其ゝゝゝにおゝよゝゝるつれ　入安

九五　述懐

身のすぎと成すおのふ　いけぶりひなん紀身　浮世とふとふ　抜あらて手ふらる身
むよちがるゝ　身ひとつを本けく

世の中は梅もせうちう酒のかんちうの樽ざかりぬいあり　赤良

世にあふつはなしかゝりけるも絵屏風まくらとあらは折るめとも　橘洲

いろかれは貝の扇れ牡丹を千金方にうきめらしくん　金鶏

九六　祝

八千代　よ路代　千とせ　かぎりぬ恩　神の治る国

五日の風　十日れ雨　松も花さく　御代はよ路川世

お日出たやくとて君か代をあしふうるこそめてあらたけれ　佳人しぐれ

入用の竹はいさゝをうんしして虎のすまふまそめてたき　米人

あふけ松ちよとゑしれ松にすむ千とせの鶴れ声の国　金鶏

附録

一　狂歌来由

たゞこれ歌の濫觴をかうがへみるに奥曲とよへるは舎人親王の日本書紀にかけられ夷振と聞えしは聖徳太子の傳暦にあらはし萬葉集には家持意吉麻呂かろしめちめらめてさせたまふとつたはらぬ中津代よりては後鳥羽院の御時水無瀬の和歌所に栗本と召されて光親宗行泰覚法眼等の諸宗匠をさかやかされ無心衆と名つけ狂せさせたまひしと六条内府御らるれしほ井蛙抄にみえて又〔虫損〕比暁月坊といふ法師こそ二なく此道に名高し其後は雄長老守武もちゐ丸未得入安なとやらん〳〵になりんかして近くは八宮とよ

耳くさせおひしゝ法方まで者くゝ好ませぬるよゝハ行風の姿よ
そのせくゝ行ありまゝ此ゝ所まて狂句くゝとよくる者ハ油煙墨
う南うれをくゝ敬りのせゝにくゝく紙屋津のまらうとなりまて
外よいちくゝ敬もなりてき大江戸ふくめてゝや楽ふを
天明のはゝめ四方赤良唐衣橘洲元丈阿弥朱楽漢江れ
を紀人ゝ所ゝれ口くよみ出しよゝ人うハいふくゝ狂句まるめ
りのらまれよりハ出れ人まて大江戸の者りをあんちふ
ありハ此よりれいさほしゝあるくゝふをのれゝ所ゝして
口ゝくゝきはりのみしゝあれとちあくゝ出のやふまたうさ
ゝ出ハちくよちくれ所あん過りきのちれゝむ人あやまちて
をのれ我しゝゝ狂句師の名よひなんち却ゝをのれこ

本懐ゝ行くゝさふ好りゝ者ゝ法ゝ教ハをのれう姪
脚子ゝとふわくゝ乃りゝ所ゝ門出ゝ
ゝの日大燈のやはゝ千こひはくゝふにゝん有ゝる

## 二 狂の一字

狂歌よりハ人ゝおりふりのらまりくゝ狂の一字をまゝ
論語曰古之狂也肆今之狂也蕩鄭康成以狂爲倨慢以對
不敬故爲慢也まゝ清狂之狂也楽天ゝ詩ゝ問我狂歌詞ゝ
ありはゝ古語ゝ狂者進取一槩之義不顧時俗ゝゝいふ
狂句師の眼をけくゝ者ゝ語ゝ和句ゝよりいふふゝよみ出ゝ
公ゝゝ業ゝありゝゝ進ゝくゝよみゝ教ゝ狂句師の才一義ゝ
行風ゝ夷曲の曲れ字ゝまゝゝ訓ゝゝ

狂歌とかきあらく又狂と狂と字形の似あふをなやまりて
狂哥とかしきちがひうとおせるらそむねんありと論せし
何ゝらにふ説あり玄川きやゝりも風いものまこひあるさとれ
あれをのこゆへは狂の一字曲の一字さゝにちゝぬとこゝろ狂ハ
まゝよゝふ通りにてまりして狂人乱心ものくるゝよいあらさる
あり曲ちらこひめくゝふして賦吟行歌詩とわかしゝ仏
なれいこそ夷歌とも夷曲ゝもよひあちあり曲をまぐれ
別あれいとてまぐりうとところゝうはこそかゝらゝつゝを
おほありるありかくつゝあれをめこ史ゝり生涯のゝえうさま
も一首ゝて三嘆すゝきめのいゝく仮實よりそれ模すきとい〻ふそ
り風ゝとゝあゝし仮基ゝ狂哥百人一首ゝ要逸ゝ

ひゝゝり風をゝりゝせゝいゝゝあゝゝき事ゝこゝを

三　ゝゝゝゝ仮基ゝ歌ゝゝ事

先達曰まり歌を法ゝゝ俳ゝ謬嘆ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ為家ゝ作ゝ影を法ゝゝ物をゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ言葉を法ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よるとゐるをのてよもゑ〳〵それうたにもよ入てふうへいゑよを
入てくよはんとすれゝはる自左ユあるものなり古人ゑ樂ユ
を入てるハ
ゑるよゑ乳豆やきびうはうれまゝまゑれてるゑや君かさ〳〵ゆと
やきびいつうてゆと 毛宮刀ゑの御ユてゑふ刀の孫信く
古人ゑより入てるハ
ゐれつるくそ青ハ家をしゆろせあふユゑんとを命そ
これそゝたいさはくおう〳〵かうねとさろれれうしさは
さりてきこゐれいゑより入てる家とふあり

四 片題の事

古ユてゝ物二ッあふ歌を二ッあうはやくよもゑきを一ッう

ほめ一ッうそ〳〵かすれ事あうたゝ人ハ月花とあうんよい
月五ゑ花五ゑと等ゑよりけくまゆうくゝゝよむ屋
ゑなり一ッ不ゑて一ッうよゑ入ゐうけてせんふく字ゆふ
けて片歌あう

五 傍題の事

愚問賢注ゑ頭阿法阿曰傍題とハ事歌れゑユゝを
ものをうゝあうとやるものあく作をゝ事ゝ人ハ物者歌う
等をそくうハくゝかうゆゝうくゝゝあ歌のうのはうく入ゐ
物れすんゐれ事れよゑみうふを傍題とつふ
ゑ合秋雨とつふて
雨ふユを等うう山の庵れぬハ年し〳〵ゑの袖ぬ色ゝを

後成々判よ雨ふれとそもつるを袖さぬれ〻ふる雨
のおもよりてきこえ侍るとハ雨をせんかくしてあの分や
そそぐ（侍りとそ）くさつ且傍歌あり

六　落顕の事

さつれい山月とつふ歌よて月をよみ出れと山をよ後さる
う落歌あり国〻山花盛とつる歌ハ山花まてハよみ
高盛の事を落〻さる事うれ事をつふ多〻し歌を
まりてよ〻あるひいわゆ世〻俗のあれとそれハ和歌
のもきりふなりる〻まれ和歌のうちかく歌ま
字をう〻ふいさり命によりむつをなり

七　ものいの事



哉　かゝふる　中の名　ふきなゝし　かか
君う〻えかゝ〻う〻さ且令文　さく〻ふ　ふとかひ名かれ
さつれえる哉りり
かゝ所ゆ者そにをゝ〻れうる。ぶ又いろまてとふ義を
かく三の句れをうり中まなりと
樣咲を山ゆれ志り所のぶう〻し月しなるぬをる
かゝ心のおらぬをゆれ和歌とつふ
う　えようる〻れ文字をきそらんとをまなり　いそ
いつる　いそ　そで　うん　筆れうひの文字をそれて
らん　らんとやにをむる
ゆをのゝふるゝにあるを係なのゝてれとる風のぶん

山うすき雲の影を拾ひき。つゐに旅のさうわあり。

て　こゝにあり。何の外よ心の物うて。上へ心のこゝろふて

○ひかりうて情をふくむて

ようこゝろちるすてゝ山嵐花の蟹をはらひけり

見心の物ふてあり

日ゐれはあの人は西へ西へ

見上心のこゝろふて

併ひかりうたかうる旅の山を月面くしを

それひかりうて情をふくむてなり

つ　つくづくと心めつきて

田子の浦こゝ出ゐくれは白ゆあふしはるねよもの情

ふつつくくくと心の情きてかゝる心あるあり

ゆ　ふつあひのや　あふ行をそんそ井ゝやりとゐくせ

月や花　花や紅葉ふれあり

雲の雨秋の消ゑと世ゐあゐゐ花やゐ染れてひゐゐる

○ねうひのや　こゝをやゐの影

○孫うひすゐゐや　やとねうふていひゐゐふと

○よびてひや　みよう詩や　をゐ何せや　月てゐや

かとゐふ影

○やすあたゐや　こゝ何のやまあにをたゐ月ふく心ふ

ますあり　ふひや夕日　ふゐやあゐ山　あゐや烟の影

○うゐうひのや　花やちゐん　人やゐゐゐんの影

○かるや　やとびすてくむのうるかやあり
ふく風と客の水とうしふうなはいと山さくれの花をさそうぞ
○をしたうや　とれあるとや　人をしられやの影
○ゆや　うつりて治定をるまふこと
あれ意を人をかうしゆやゝきたくの枝のことをもうたうゆ
人をうるゆやをうハせまし
○やハ　ゆやと同しくとふてよとあるう
意すとかゆる是をも深もつてこれみの為とやおもひる
素月の外れかのとやをとる分の外とふんに出
かえゝくあるこ
○とや　をひうみくをふたう

切人をまもくゝ野人の花為を青とさうる接ぬせとぞ
白の井ユあれハとそやれむとあるこ
切秋の春れるこゝとあゝしぞや某を風の吹こうるん
られハ春れるこゝとあゝしこそやれんこ
そ　その字れとあるうくあれもまけいるれ字をとむる
とんこゝ　花ぞうるめぞ　月ぞやれぞ
の数こ
きの字みくとやるハ数ぞいひしきくの字をそこ光
たるハ　世をぞうるにゝの数其ゆをくぬつふ
むの文字をそこもれと初ハまけるをそとむこん
ひるくよゝ

こそ　こそとのびてい去けせてねへめえれ去せ字ふてとあるあり
ものをそそぐれあ　　ありとそそぎけ　　君をそそぎまて　かと
もておしてきろくし

ぬ　をたちんぬ　　ふのぬとそふりけあり
ちりぬるもかをたのそせ物のそふ意しきけの去びてこせん
ちりをそんぬるとふてふてふあり
をを辺のこけきもちめ山ゆふれかけるあくもゆまもを
たちをそ〜〜〜しひん

ろ　ろるるひめろ　　ろれよ通ふろ　　我ユろふか
ちく〜ゐろ　　ふよとそろ　ふとめれるるるひのろなり
つられまもつをれんめのかをうそせ月をちゆ(ゆ)徳のつれそ

こすれんものろなり
吹まよふ野風をさむる秋をそのうつをもりか人のをれ
うはりをゆるふれ公なを
ほ　をろれろにをハとをむろハ上へろふてまををなり
へいそきりき今ろんまをの方を社雲月日へををおあの人ゆろや
ちひきゆをちものはりきめをつめくゆ取り同し丸ねせんをを
ふとをふへをきくをまををあり　はをれもひきや　あり
なををよと上ユあへふうあくををとをとをひるをんへをを
し　過去のし　　現在のし　　やすをのし　　三あり
其とへい意よ々ふ赤きのふまを語ろまへ。語ふまへ。語ふしま重
ろれ過去を紀ひろし　しの字あり

白雲まとぬ折ふし。とふ虎れ枝まこ。ちる秋のこ多ノ月
これ現在今こゝろ茶のしこ
ちる花の消よし。こまる地ちゝ不都合にをとゝ毛しやい
これ中とめよあきあらしあり
たゝ 滝 泊 不假餘緣といひて拙のさしきふまりゝあるとゝ
きびしくくりちゆるよにをいあり初人のうちい文字のこゝ
ぬ西へゐぐく、とりちゆりこゝろ大きにきはしきるこ
たゝ をれだたくいのりこれをさもかしこしとふこゝろゑりちひ
まこゝをれるこゝさるあゝをせあゝこれだにゆくあれゝこゝ
ゆよも用也
天 大りこだふと日しゆとちゝ心ノ

これこだふ　これこさ　雲ざ　ゆくちゝ
まにちの事中くつゝくゝこれいゝ月ての初
ゆのゐよもこて古人初れちゝこと十分れ一をのこ
あくゝとおりあくきあり

八 三躰

○ふとくく大なる折　去文のこゝあゝ
○不をくゝこゝひる折　秋冬のゝあゝ
○ちん為る折　意格のゝちゝ
かゝゝにかくよ迎しゝといゝよいゝゝ
情ゝくこゝをゝあゝへゝれこて日事意格の
ちゝこゝくてよし

九　皮肉骨三斛　古人狂歌

皮

蛤のまれまるかすをとんろん国ろう紅の毒はよこそ

田楽のこうれて君れ恵しきいする山椒のこをあらうあ人

肉

きくやいろに本の色つくふ様さにもけぶよい蔵るるいろひみとい

探され今り合ふ弁おれいをいきろふもきろれさろうと

骨

君ろと書蔵れいこそ恵しぬろ命を泰い拾ひろ公

九十九夜通ひし人の足つるやこ功ろく泰いこをぬろ仕

十　六義　古今の序よりけるの風賦比興雅頌とい

一風ハ　もの之ようをとこ之その俗をきろしむるこ故ニ

二賦ハ　何を作くるこ之かそある俗おれいろをこ

三比ハ　おもふこと之むものこ之ろこ人ニするこ事を

四興ハ　なすこ之へうこ之ふ

五雅ハ　かれお是をあろるこたこ人て無俗ニむたこ人

六頌ハ　たこ之こ之ふ儀あり正しく正しくれいありれ

すくありたこ之こ之ふ

あるくこ之ろにあけくほむるあり不むるこ之ひれ

るなれハ祝ふとふ
此六義の事ハむかしより説もきこえねとふかくよう
うくいひつたへし事ゆへ其意をうしなふそれ
故こゝに記れ

十一　十骵　今人狂歌

長高体

あし原やけさハきのふもまかり出てたの角くむすれあへかし　漢江
かく斗めてたくみゆる世中をうら[illegible]しかのたく月かな　赤良

見様体

酒は呑御用の外る馬車者りとも花市乃中ゝ　蓬莱
田子の浦に歩出てみれハ富の宝永山も雪をかつて　仲堂

幽玄体

ひすれけとかちけうき夕くれと詠む定よふ人もよみくみぬ也　有
みえゝ不二の花よふ花の雪と乃あら雲　播洲

濃体

あさかほの柳の糸もむすひ玉風より外れしくものハなし　白人
縫し笠ハ所とかわぬ雨ますて村のやとまで通ふ月かけ　三和

有一節体

鴫ハ立ねと西行乃身ゆへに目にふ門沢乃秋の夕くれ　東作
縫物の雛へ地走ゝ農業を翔へあけかたちかけ　定丸

面白体

我もよりし杵あそろしやいつかあり井を引さまるそくみ鶴　[illegible]

年の坂登る車ハ乱よきぬ由さんとしても終へ戻られ　秀丸

拉鬼躰

哥よみハ下手こそよけれ天地の動き出してハたまる物かハ　飯盛

母の乳父のすねをも齧りし名残をしんで喰ふものなりけりは　光

有心躰

蕪こそはるふるあたふ又ありとはるふくべ咲たる秋の夜長さ　近丸

山里ますむもあしきものゝきるすも実もぬ程よさびしさの夜　金鈴

事可然躰

汗水を流して習ふ剣術のやくにもたゝぬ御代そめでたき　杢網

三度ふく飯さへこはしやはらかし思ふまゝにはならぬ世の中　湖鯉鮒

濃躰

思ひつゝぬるや若菜みてし野の花を綿の袂てかへさる　金埒

涼そろそ躰の夕暮か思ふなる吹きまふ風のかをるを青ち　俊満

十二　躰用對

扇ハ躰　あふぐ　ひらく　たゝむ　さしハ用也

雲ハ躰　たなびく　くだる　きほふハ用なり

對とゆる事ハ

硯ハ躰　すり　筆　けいさん　水入ハ對也

刀ハ躰

つむ　ふち　うら　同貫　さくハ剪も

此神用剪とゝ事をよくもとゝ[illegible]人もとゝ[illegible]されいとゝ一首よゝ
出んとすゝ[illegible]自由をゝさに考て考へべし

十三　禁忌

あゝやけよかゝりゝ[illegible]変してよむゝにきんゝをいろん
あゝ[illegible]しき風流その世れ誹諧めきあれ事まゝて人を
おもゝふゝ人の時うゝもゝ[illegible]へうゝ[illegible]風雅の情よあゝさゝ事おとはゝんてよむ

新宅之

ゝ門ゝ　たゝゝ　改ゝし　火祭

婚姻之

儀別之

あゝぬ　ゝあゝ　ゝあゝ　ゝゝ　ゝゝ

ゝゝ[illegible]ゝゝ[illegible]ゝゝ考ゝゝ人ゝゝ

十四　七種菜　芹（セリ）　蘩蔞（ハコベラ）　鼠麹草（ゴギヤウ）　蘩蔞（ハコベラ）　佛座　菘（スヾナ）

蘿蔔（ダイコン）

十五　櫻春良　鞠場四木　柳夏巽　楓秋坤　松冬乾

十六　紀貫之　承香殿四傑　紀友則　凡河内躬恒　壬生忠岑

十七 新六哥仙

後京極摂政　大僧正慈禎　皇太后宮大夫　俊成　權中納言定家　従二位家隆　西行法師

十八 梨壺五人

大中臣能宣　清原元輔　源順　紀時文　坂上望城

十九 上東門院五歌仙

和泉式部　紫式部　赤染衛門　馬内侍　伊勢太輔

二十 西三條三世

實隆　逍遥院　公條　称名院　實枝　三光院

廿一 日本三部書

舊事紀　廐戸皇子蘇我馬子奉　勅撰凡十卷

古事紀　安萬侶奉　勅撰凡三卷

日本紀　舍人親王太朝臣安麿奉　勅撰凡三十卷

廿二 本朝六國史

日本紀　三十卷舍人親王安麿撰

續日本紀　四十卷菅野真道藤原継縄撰

日本後紀　四十卷藤原緒嗣撰

續日本後紀　二十卷太政大臣良房後春澄善繩撰

文德實録　十卷右太臣基経等上ル實ハ都良香撰

三代實録　五十卷左太臣時平撰實ハ大藏善行撰

廿三 二十一代和哥集

古今　後撰　拾遺　以上三代集ト云　後拾遺　金葉

詞花　千載　新古今　已上八代集とつふ　新勅撰　續後撰
續古今　續拾遺　新後撰　玉葉　續千載　續後拾遺
風雅集　新千載　新拾遺　新後拾遺　新續古今
新勅撰已下を十三代集とも云

## 北四　万葉假名

い　以伊夷意異
は　波葉半頗端
ほ　保帆甫浦本
へ　辺篇遍部反
に　仁尒荷而耳
ろ　呂路爐漏露
ち　止登徒土途
り　利里裏離梨
ぬ　奴怒努駑主
る　留類累流偐
を　志越緒小恩



わ　和王倭猥詣
よ　与夜餘代余
れ　禮連例亭鈴
つ　津都通豆圖
ね　南名難奈那
む　武舞無年勢
ゐ　井居位圍遺
の　能之濃野農
く　久具空宮句
や　於男尾推呼
け　計氣景解夏
こ　巨古湖固粉

か　加可家閑香
た　太他田當多
そ　曾楚疎祖宗
ら　良羅賴乱螺
む　宇卯有右雨
ま　満麻磨末間
ふ　布婦風府普
え　衣絵縁得柄

て 天亭手傳弟
さ 左散作沙狹
ゆ 油遊由弓猶
み 美見身御味
え 衛會栄永穢
も 茂毋寂藻毛
す 須壽守數寸

七五 古狂歌書

古今夷曲集　曉月酒百首　古狂歌集
雄長老百首　後撰夷曲集　吾吟我集
堀川狂歌百首　守武百首　正式自歌合
銀葉夷歌集　入安百首　資之百首

あ 安寧阿哀愛
き 紀鬼帰祈喜
め 女免目命明
し 志思私姿至
ひ 飛比火日肥
せ 勢施前是晴

卜養狂歌集　貞流狂歌集　貞徳百首　拾遺家土産
宗壇百首　由巳百首　難波土産
此外家々に集多く後々世に出でたるもあれども大なる書多くしるす

七六 今狂歌集

若葉集　萬載狂歌集　德和歌後萬載集
才藏集　故混馬鹿集　千里同風狂歌集
四方のそなた百首　あふむ抔　東作亂百詠
木工阿弥風百首　落栗艸庵集　百鬼夜狂
桑揚菴家集　菅江家集　白鬼家集
喜きや風呂　狂歌文庫　今狂歌袋

大根太木狂歌集　狂月坊　銀世界　普現象

むしろ　汐干の土産　玉千寿狂歌合

狂歌三十六歌撰　狂歌俳優風　ゑのはし

狂歌たからの使　新古今狂歌集　狂言曽我百首

拾遺狂歌集　江戸名所狂歌集　四方山基一名其告双帝

[九七] 五行五首題

水　火　土　金　水

[九八] 五味五首題

耳　辛　苦　酢　鹹

[九九] 六根六首題

眼　耳　鼻　舌　身　意



[三十] 七夕七首題

待七夕　七夕雲　七夕霧　七夕霧

七夕長　七夕船　七夕陵朝　七夕搭

[三十一] 重陽九首題

菊映月　菊帯露　菊似霜

河邊菊　寄菊恨　山路菊

寄菊祝　寄菊契　寄菊抜

[三十二] 十界十首題

地獄　餓鬼　畜生　修羅　人道　天道

声聞　縁覚　菩薩　仏界

[三十三] 十如是十首題

如是相　如是性　如是體　如是力　如是作
如是因　如是緣　如是果　如是報　如是本末究竟等

三十四　十三夜十三首題

九月十三夜　月前星　月前時雨　月前萩
月前鹿　花洛月　古寺月　寄月忍恋
寄月変恋　寄月別恋　寄月述懐　寄月旅泊
寄月祝言

三十五　十五夜十五首題

十五夜月　見月　翫月　憐月　思月　惜月
暮天月　浜赤月　暁更月　月前萩　月変萩
月前落　寄月恋　寄月友　寄月祝

三十六　堀川院太郎百首題

春　二十題

立春　子日　霞　鶯　若菜
残雪　梅　柳　早蕨　摘
帰雁　春雨　春駒　喚子鳥　苗代
菫　杜若　薇花　款冬　三月尽

夏　十五題

更衣　卯花　葵　菖蒲
早苗　照射　五月雨　蛍
蚊遣火　蓮　氷室　郭公　荒和祓
秋　二十題　橘　泉

立秋　七夕　荻
涼　苅萱　蘭
露　霧　槿
搗衣　虫　菊

冬　十五首

初冬　時雨　霜
空音　子音　霰
神楽　雪降　炭竈　氷　埋火　雪　細代　除夜
初恋　忍恋　恋十題　不遇恋　後朝恋　初逢恋
遇不逢恋　接恋　思　片思　恨

荻　雁　駒迄　紅葉　月　九月尽　女郎花　鹿



曉　雜　二十首
河　松　竹　苔
海路　鶴　孫　関　山
懐舊　接　別　山家　搭　田家
夢　無常　述懐　祝

三十七　堀川院次郎百首題

春　十八首

除夜　春日　基曙　遊絲
元日　石清水除時祭　志賀山越　稲荷詣
賭弓　桃　落花　躑躅
未刻花　紅梅
雉子　残雪　蛙

加茂祭　夏十二歟
榊佐　夏衣　夏艸　瞿麦
蟬　避暑　夏虫　扇
水鶏　扇川　夏撫
秋十八歟
残暑　晩立　秋風　七夕後朝　八月十五夜
九月九日　秋夜　嵐　稲妻
狼田　菜香　暁月　作　秋山
松虫　待宵　蓼
冬十二歟　蟲
霙　初雪　降幸　落葉
五節　椎茶

彩　衾　琴　琴　貢調　佛名　旧年立春
忍恋　隔一夜恋　恋十歟　経月恋　経年恋　隔夜恋
不見書恋　且只恋　庶見恋　待人恋　別恋
雜三十歟
雲　星　出湯　石　水海　原　滝
故郷　寺　社　榊　桂　小篠　萍
元服　賀　七夜　仙宮　唐人　五昭君　妓女
老人　泉郎　船　蔭　笛　琴　蜘蛛
猿

[illegible]
おせちのぜん部七巻ひまうけ出れそれ
[illegible]
寛政[illegible]

## 燭夜文庫

金鶏野客

金鶏先生著述　全部三冊出来

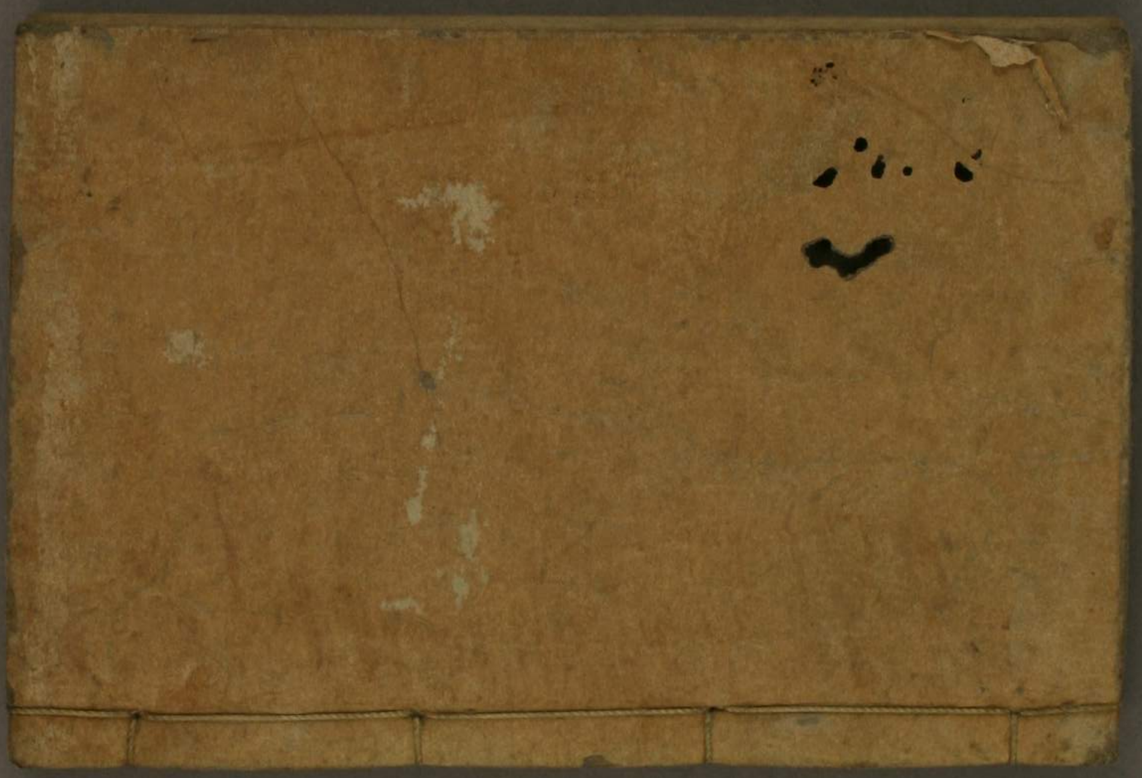
風俗文選に能はずして賛銘頌賦記等は狂文を集む
人情おもしろき事うがつ事も四方はあれど和学
狂文和学の人諸〳〵盃ひろふ書を四方先生をはじめ
諸名家はおもしろき序跋数篇載る


瑞玉堂鐫版目録　大傳馬町二丁目　大和田安兵衛

古今和歌集　彩板　全三冊
傍訓千字文　全一冊
清正草　校合　全二冊
諸流秘傳　実花早指南　全一冊
侯勢物語　目　全二冊
早指南後篇　実花時勢雅　全一冊
新古今和歌集　彩版　全四冊
畫本百馬圖　全二冊

畫本大和雲　全三冊
繪本勢功草　武者　全三冊
同　武名薫　全二冊
同　彩色　全三冊
同　五の池水　全三冊

画圖擬要　全二冊
繪本[illegible]草　全三冊
同　花異人葉　全三冊
陸奥名所和歌集　全一冊

京都　須原屋平左衛門
大坂　河内屋喜兵衛
尾張　風月孫助
東都　蔦屋重三郎
大傳馬町二丁目　大和田安兵衛
寛政十二年庚申春三月開鐫

三條通冨小路
心齋橋北久太郎町
名護屋本町
本町筋通油町